

三木市

# 戸田遺跡

## 発掘調査報告書

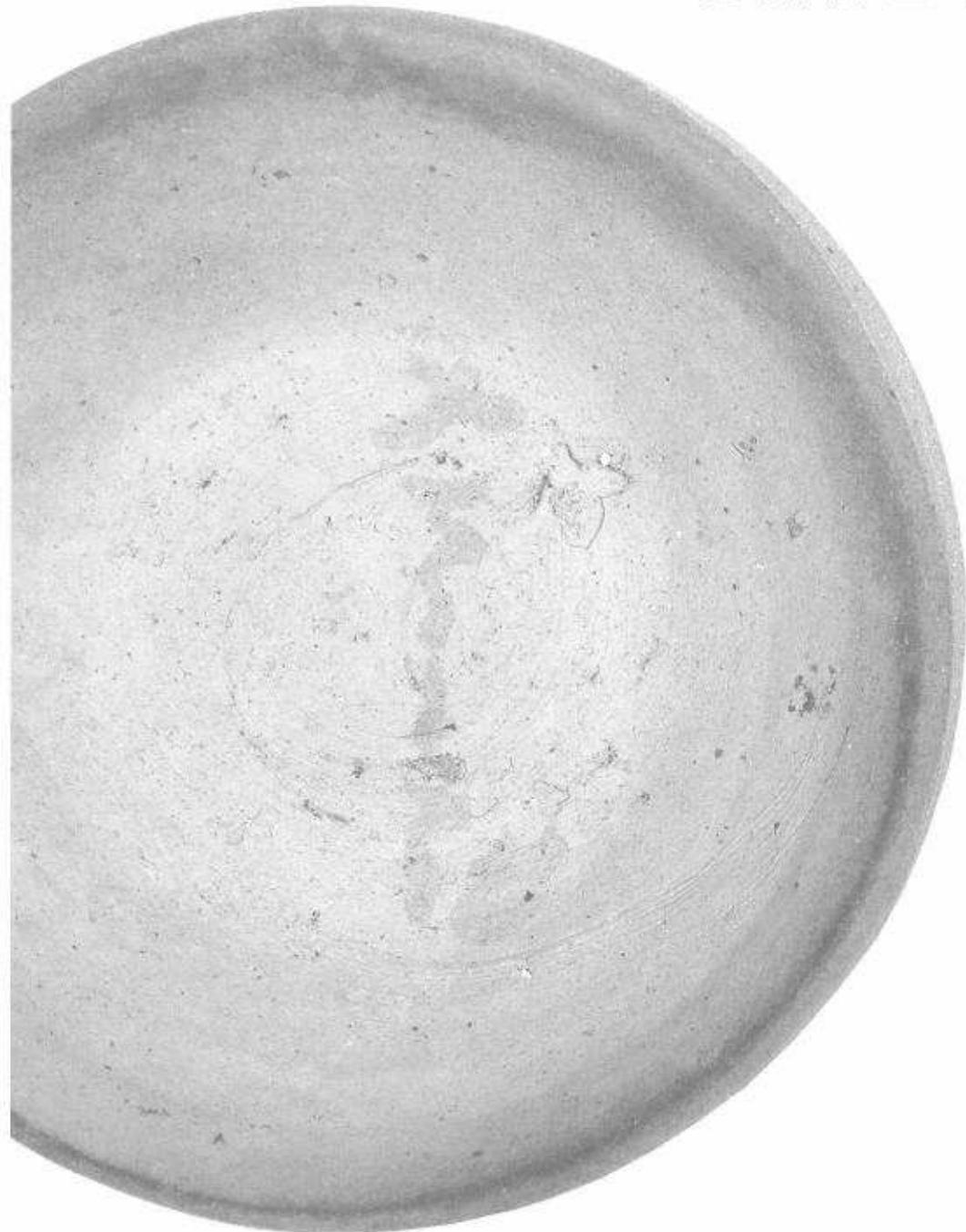
－市道情報公園中央幹線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2003年

兵庫県教育委員会

と  
だ  
い  
せき  
戸田遺跡

発掘調査報告書



# 本文目次

第1章 序言 .....	1 p
第1節 凡例 .....	1 p
A 発掘調査事業	
B 整理・報告書刊行事業	
第2章 調査概要 .....	2 p
第1節 経過 .....	2 p
A 調査に至る経緯	
第2節 遺跡の概観 .....	3 p
A 遺跡の背景	
第3章 調査成果 .....	3 p
第1節 各調査区と基本土層 .....	3 p
A 調査地区および調査区	
B 基本土層	
第2節 遺構と遺物 .....	9 p
A 1区の遺構	
B 1区の遺物	
C 2-1区の遺構	
D 2-1区の遺物	
E 2-2区の遺構	
F 2-2区の遺物	
G 3区の遺構	
H 3区の遺物	
I 4区の遺構	
J 4区の遺物	
第4章 まとめにかえて .....	21 p

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2 p
第2図 周辺の遺跡	4 p
第3図 調査区位置図	5 p
第4図 調査区平・断面図(1)	7 p
第5図 調査区平・断面図(2)	8 p
第6図 全体図	9 p
第7図 SK2・3遺構図	10 p
第8図 包含層出土土器・石器	10 p
第9図 全体図	11 p
第10図 SK2断面図	11 p
第11図 SK1・包含層出土土器	12 p
第12図 SK1遺構図	13 p
第13図 全体図	13 p
第14図 SK1・包含層出土土器	14 p
第15図 全体図	15 p
第16図 各遺構図	17 p
第17図 SK12出土土器	18 p
第18図 包含層出土土器	19 p
第19図 全体図	20 p
第20図 突起部をもつ炭土坑の類例	23 p
第21図 坑底に溝状構造をもつ炭土坑	24 p

## 表 目 次

表1 事業体制表	1 p
表2 各調査区概要表	6 p
表3 炭土坑一覧	22 p
表4 土器観察表	26 p

## カラー写真図版目次

- カラー写真図版 1 上：遺跡の遠景（西から）  
下：遺跡の遠景（北から）  
カラー写真図版 2 上：調査区全景（東から）  
下：調査区全景（垂直写真）

## 写真図版目次

- 写真図版 1 上：調査前の状況（東から）  
中：1区全景（西から）  
下：1区北壁断面（南東から）  
写真図版 2 上1：1区SK2断面（東から）  
上2：1区SK3断面（北から）  
上3：2-1区全景（西から）  
下：2-1区SK2断面（南から）  
写真図版 3 上：2-2区全景（東から）  
中：2-2区北壁断面（南西から）  
下：2-2区SK1（北から）  
写真図版 4 上：3区全景（西から）  
中：3区北壁断面（東から）  
下左上：3区SK2炭層検出状況（東から）  
下右上：3区SK7検出状況（北西から）  
下左下：3区SK8断面（北東から）  
下右下：3区SK10断面（南東から）  
写真図版 5 上：3区SK10（南西から）  
中：3区SK12土器出土状況（東から）  
下：3区SD1（北から）  
写真図版 6 上：4区全景（東から）  
中：4区北壁断面（南西から）  
下左右：作業状況  
写真図版 7 上：2-2区SK1出土土器  
中：3区SK12出土土器  
下：包含層出土土器・石器

# 第1章 序 言

本報告書は、兵庫県三木市志染町戸田において兵庫県埋蔵文化財調査事務所が実施した戸田遺跡についての本発掘調査の成果をまとめたものである。

## 第1節 凡 例

### A 発掘調査事業

- 調査の受託 確認調査は三木市教育委員会によって実施されており、その成果を受けた本発掘調査はひょうご情報公園都市の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
- 調査担当 本発掘調査は、同調査事務所調査第1班の平田博幸と長濱誠司が担当した。
- 調査工事 発掘調査は「戸田遺跡発掘調査工事」として株式会社エイハタに工事発注し、平田・長濱の監督の下実施した。
- 航空測量 調査に伴う空中写真撮影及び平面図化測量は、株式会社日測関西支社に業務委託を行った。

### B 整理・報告書刊行事業

- 事業の実施 出土品の整理作業および本報告書の刊行は、平田・長濱を中心として同調査事務所（神戸市兵庫区）において、平成15年度に実施した。
- 整理作業 出土品（土器）は香川フジ子・西口由紀・島村順子・木村淑子・前田千栄子・宮野正子・早川有紀により接合・復元を行い、大前篤子が実測・トレースを行った。また、遺構図については、長濱の作成した下版を大前と西村美緒の両名がトレースを担当した。
- 座標と標高 調査区全図・各遺構平面図に付記した座標は、世界測地系に基づく平面直角座標系により表記した。また標高は、海拔高（T.P.）を使用している。
- 遺構の名称 遺構名の表記は溝をSD、土坑をSKとし、各調査区毎に1番号から開始している。
- 土器の表記 揭載した土器の実測図のうち、須恵器を断面黒塗りとし、土師器は白抜きで識別表記する。
- 執筆と編集 本書の執筆は第3章の「基本土層」・「遺構」を長濱が、その他は平田が担当した。編集は長濱と平田の両者で行った。
- 事業の体制 表1 事業体制表

		平成14年度（2002）		平成15年度（2003）	
所長		藤本修三		平岡憲昭	
主幹		苦瓜一成・輔老拓治・泉吉嘉			
主任調査専門員		池田正男・井守徳男			
総務課長		森俊雄		織田正博	
班長	調査第1班	吉田昇	整理保存班	池田正男	
事業担当		平田博幸	調査第1班	吉田昇	
調整担当		長濱誠司	整理保存班	長濱誠司	
事務担当	企画調整班	高瀬一嘉	整理保存班	村上泰樹	
事業期間	平成14年7月～8月		平成15年4月～12月		

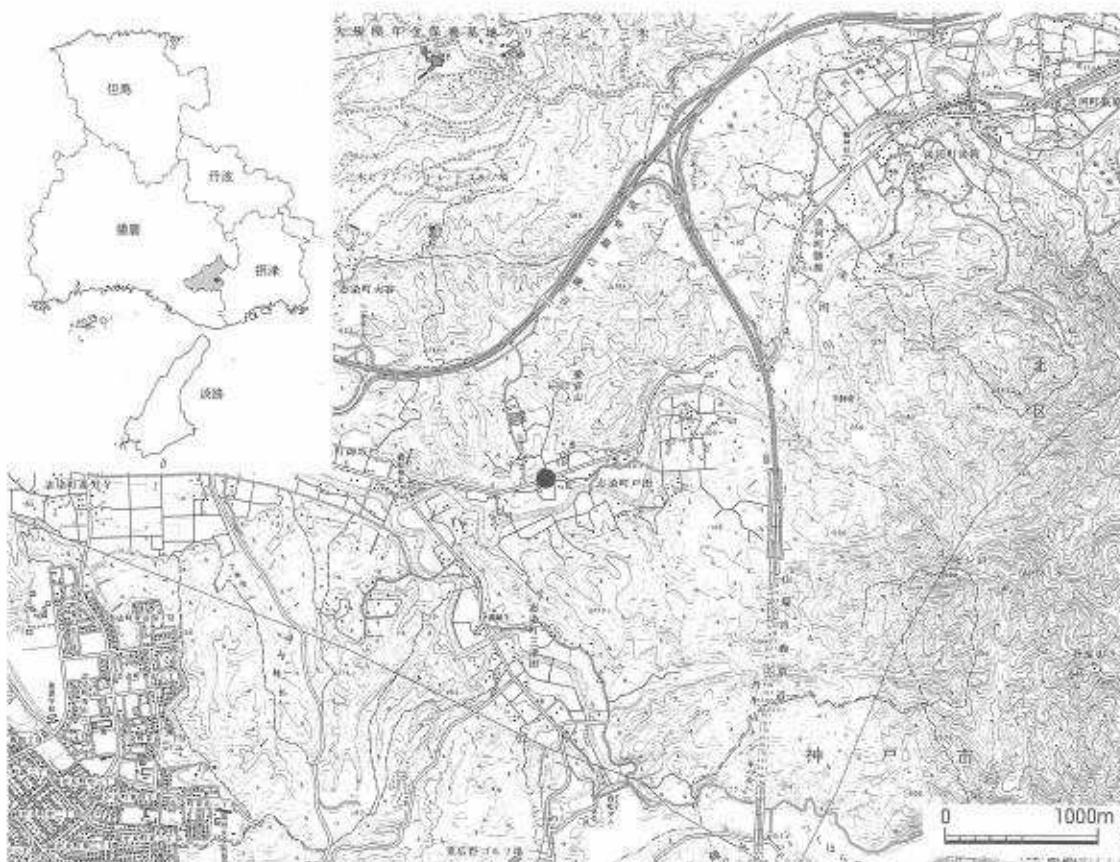
## 第2章 調査概要

### 第1節 経過

#### A 調査に至る経緯

兵庫県企業庁が三木市志染町に計画する「ひょうご情報公園都市」は、1. 人と自然が共存する都市空間の形成、2. ダイナミズムを生む新産業拠点の形成、3. 豊かな生活が享受できる生活空間の形成等の基本構想の実現に向けて、住と産が共生する新しい都市(新産業創造拠点)の創成を目指して進められている事業である。

今回実施した戸田遺跡の調査は、この公園都市に進入するためのメインのアクセス道路の建設に伴う本発掘調査である。本道路自体が本来的に三木市の市道となるものであるため、確認調査は同市教育委員会によって平成13年6月に実施された結果、2カ所に遺跡が広がることが明らかとなった。このうち、公園都市に近い箇所については、同市教育委員会によって同年の10月～11月にかけて約400m<sup>2</sup>の本発掘調査が実施され、市内初となる中期縄文時代遺跡であることが判明した。そして、残る一カ所が今回調査を実施した同県道北側の地点であり、同公園事務所長からの調査依頼を受けて本発掘調査を実施した。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 遺跡の概観

### A 遺跡の背景

#### 位置

調査地点は三木市域の南東隅に近く、東側と南側に接する神戸市北区との市境まで1.5km～2.0kmの距離にある。三木市の西端を流れる加古川に注ぐ美嚢川の支流である淡河川（志染川）によって形成された東西方向の細長い谷地形の内部に遺跡は位置し、その谷を東に進むと勝雄の小さな峠を介して神戸市北区の淡河へと至る。また調査区西方の御坂神社で南に分岐する谷は、呑吐ダムを経て同区の山田へと続く。地形的な観点からみると、陸上および河川交通の要衝に位置するわけではなく、三木市街地と神戸市北部あるいは加古川と武庫川を内陸部で結ぶ交通路のひとつに面していることが知れる。

#### 地形的要因

遺跡の存在する谷部の基本地形は、その中央を流れる淡河川に向かって谷の南・北に形成された数段の段丘と、それに繋がる扇状地によって形成されており、その扇状地の背後を緩やかな傾斜を示す丘陵が取り囲んでいる。

調査地点の位置する南向きの扇状地は背後に細長い谷を控えるため、その基盤となる土層が複雑に交錯している。小規模な土石流が積み重なって形成された結果によるものであり、県道に沿って細長い形状となる本調査区でも、各地区によってその基盤層（立地条件）が著しく異なる状況にある。

#### 歴史的要因

上記したように、調査区の存在する谷部は神戸市北区の淡河地域を介して、東播磨の動脈である加古川流域と摂津地域を流れる武庫川水系の中・上流域とを結ぶ東西交通路のひとつとなっている。この谷部内には御坂遺跡・戸田遺跡第1地点、神戸市域に入って野尻遺跡・勝雄遺跡と小規模な集落遺跡がほぼ等間隔に続くが、調査が十分に行われていないためその時期・性格とも不明な点が多い。これらの遺跡の多くが古代から中世に属することから、本谷部域の開発がこの時期以降に本格化したことが想定される。ただ、淡河地区の中心的な遺跡となる淡河・中村遺跡のように規模の大きな集落遺跡や、御坂遺跡から西側のイヤワ遺跡・細目遺跡・吉田遺跡・安福田遺跡等のように遺跡が近接することのない状況が、本遺跡周辺域の歴史的な特性を端的に示している。

詳細については、以下に記す各遺跡についての調査報告書等を参考として頂きたい。

参考文献 「三木市史」 三木市 1970年

「淡河萩原遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）・（Ⅱ）」 淡神文化財協会・萩原遺跡調査団 1992年

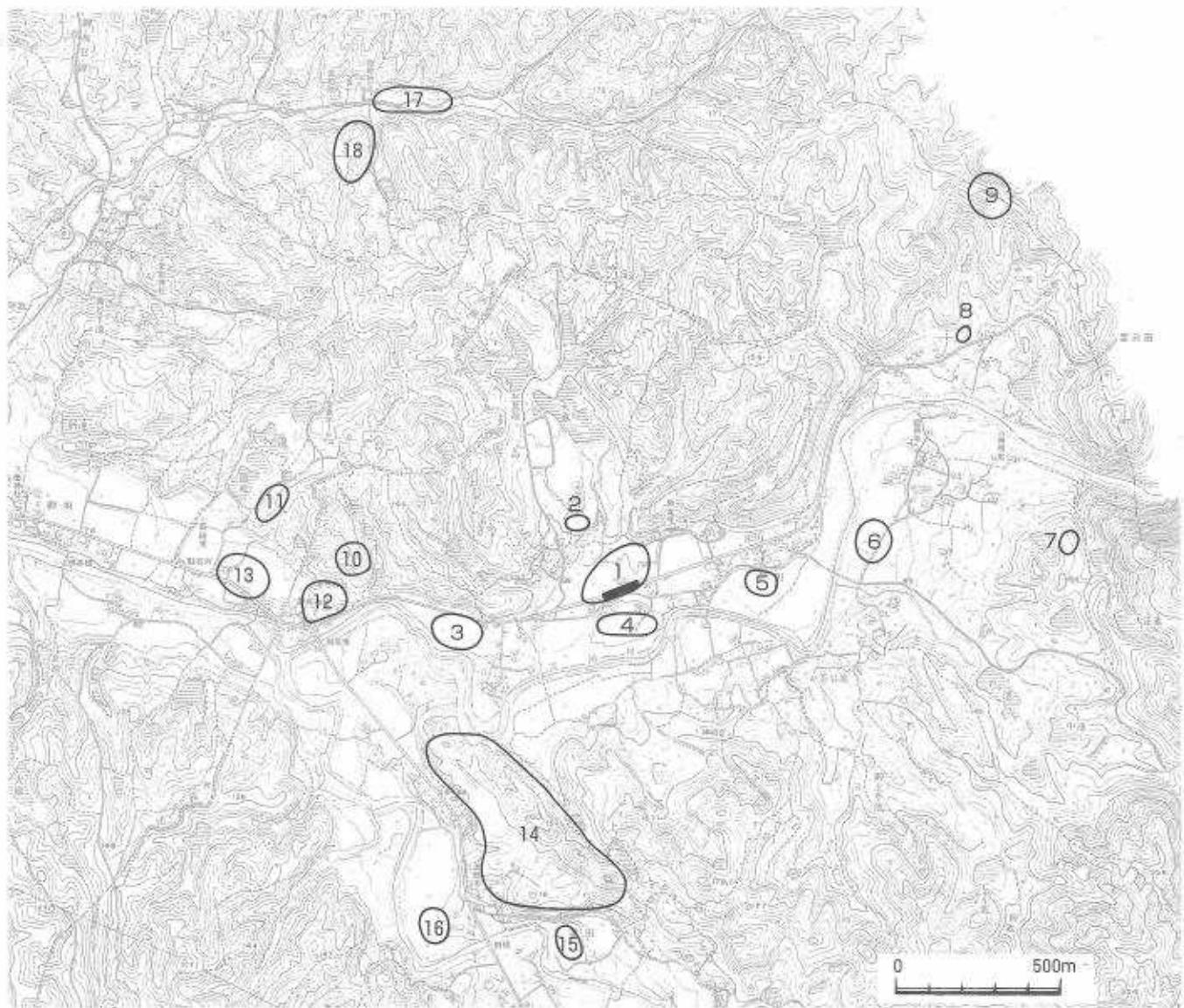
「淡河中村遺跡」 淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査団 1992年

「淡河中山遺跡発掘調査報告書」 淡神文化財協会・淡河中山遺跡調査団 1993年

「御坂遺跡」 兵庫県文化財調査報告第132冊 兵庫県教育委員会 1994年

「奥遺跡・宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡」

兵庫県文化財調査報告第153冊 兵庫県教育委員会 1996年



- 1.戸田遺跡 2.戸田奥谷遺跡 3.戸田原ヶ市遺跡 4.戸田前田遺跡 5.戸田井ノ姿々遺跡  
 6.小戸田遺跡 7.長塔遺跡 8.戸田神宮寺遺跡 9.勝雄城経塚 10.老塚遺跡  
 11.老谷墳丘墓群 12.御坂遺跡 13.御坂黒岩前遺跡 14.三津田城址 15.三津田矢ノ向遺跡  
 16.戸田明神遺跡 17.伽耶院東遺跡 18.伽耶院経塚

第2図 周辺の遺跡

「勝雄経塚」 兵庫県文化財調査報告第158冊 兵庫県教育委員会 1997年

「淡河萩原遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ次発掘調査報告書」 淡河萩原遺跡調査団・株埋文 1999年

「淡河萩原遺跡第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ次・淡河中山遺跡第Ⅱ次発掘調査報告書」

淡河萩原・淡河中山遺跡調査団・株埋文 1999年

「三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ 昭和60年度～平成6年度」

三木市教育委員会 2000年

「南僧尾」 神戸市教育委員会 2000年

「勝雄遺跡」 I 神戸市教育委員会 2000年

「淡河木津遺跡第1次・第2次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会 2002年

## 第3章 調査成果

発掘調査の成果については、まず第1節において各調査区の形状・面積・地形的な特徴等と共に、基本的な土層および層位的な状況について記述を行う。第2節では、各調査地区毎の詳細な成果を述べる。調査区毎に項目立てを行い、そこで検出された遺構の概観を記した後、検出された遺構別にその特徴と出土遺物について記述を行った後、最後に包含層内出土遺物に関して記すこととする。

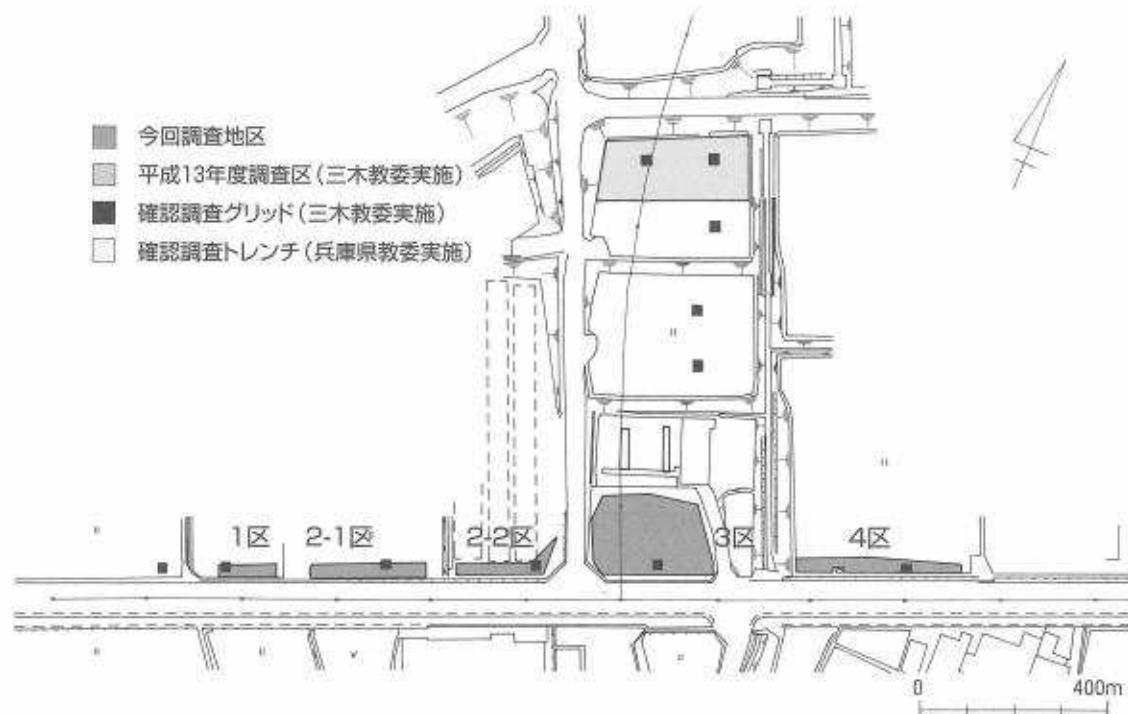
なお、土器については限られた時期の遺物としてのまとまりが強いため、土器個別の記述は省略し、型式毎にまとめて特徴を示すこととした。従って土器個別の各形態的・手法的特徴についての詳細（法量・調整）は、後記した遺物観察表を参照頂きたい。

### 第1節 各調査区と基本土層

#### A 調査地区および調査区

##### 調査地区

公園都市中央幹線道路に係る埋蔵文化財に関しては、平成13年度と14年度の2年度において4次にわたる調査を行っている。各調査時の調査位置は、第3図に示したとおりである。平成13年6月に三木市教育委員会が実施した確認調査区は「■」印で示し、同年10月～11月に同市教育委員会の実施した本発掘調査区は図の上端部(30%網伏せ)に相当し、今回の調査区は図下端部の東西に細長い範囲(50%網伏せ)となる。3区北側の2本のトレンチ(10%網伏せ)については、今回の本発掘調査の直後に実施したものである。



第3図 調査区位置図

## 調査区

今回の本発掘調査区は前記第3図のとおり県道に沿って東西方向に細長いうえ、同県道に繋がる現道と農業道路および水路を確保する必要から、調査区が5区画に細分されることとなった。各調査区の名称は西端部を「1区」とし、東に向かって「2-1区」・「2-2区」・「3区」・「4区」と呼称する。1区・2-1区・2-2区・4区は県道への取り付き部分となるためその幅は最大で約3m程度、延長は最も短い1区が14m、最長は4区の35mを計る長方形形状となる。唯一、本線部分に相当する3区は幅約17m・延長約25mの多角形状を呈する。これら5地区の総面積約630m<sup>2</sup>が、今回の調査対象面積となる。

## B 基本土層

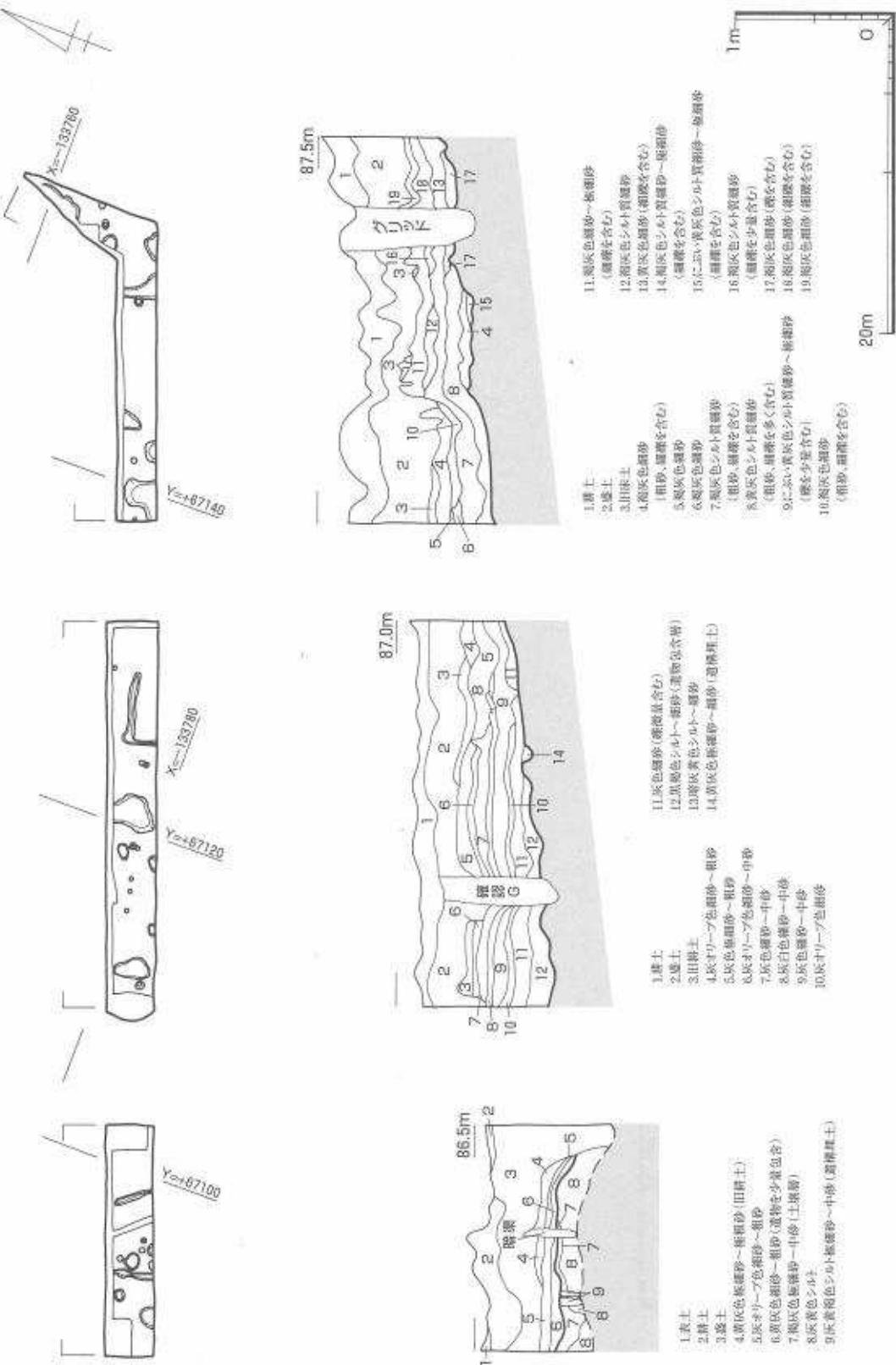
**土層の状況** 今回の調査区は3区を除いては場整備の際の厚い盛土に覆われ、地形は改変されている。しかし搅乱など地下への影響はほとんどないため土層の状況は良好に観察できる。調査区における層序であるが、1～3区と4区では様相が異なっている。

**1～3区** ほぼ水平な堆積の状況を見せる。基本的な層序は現表土、盛土と続き、その下層には場整備前の表土が残存する。さらにその下層は旧水田面が数面にわたって存在し、旧耕土層と酸化鉄が沈着した旧床土層が互層となっている。旧水田面下に堆積する黄灰色系シルト～細砂の直上が遺構面となる。遺構面は西から東へ高まり、2-2区東半部から3区西半部がピークとなる。このピークからやや下がった付近に遺物包含層が存在し、疊とともに多くの土器片を包含している。

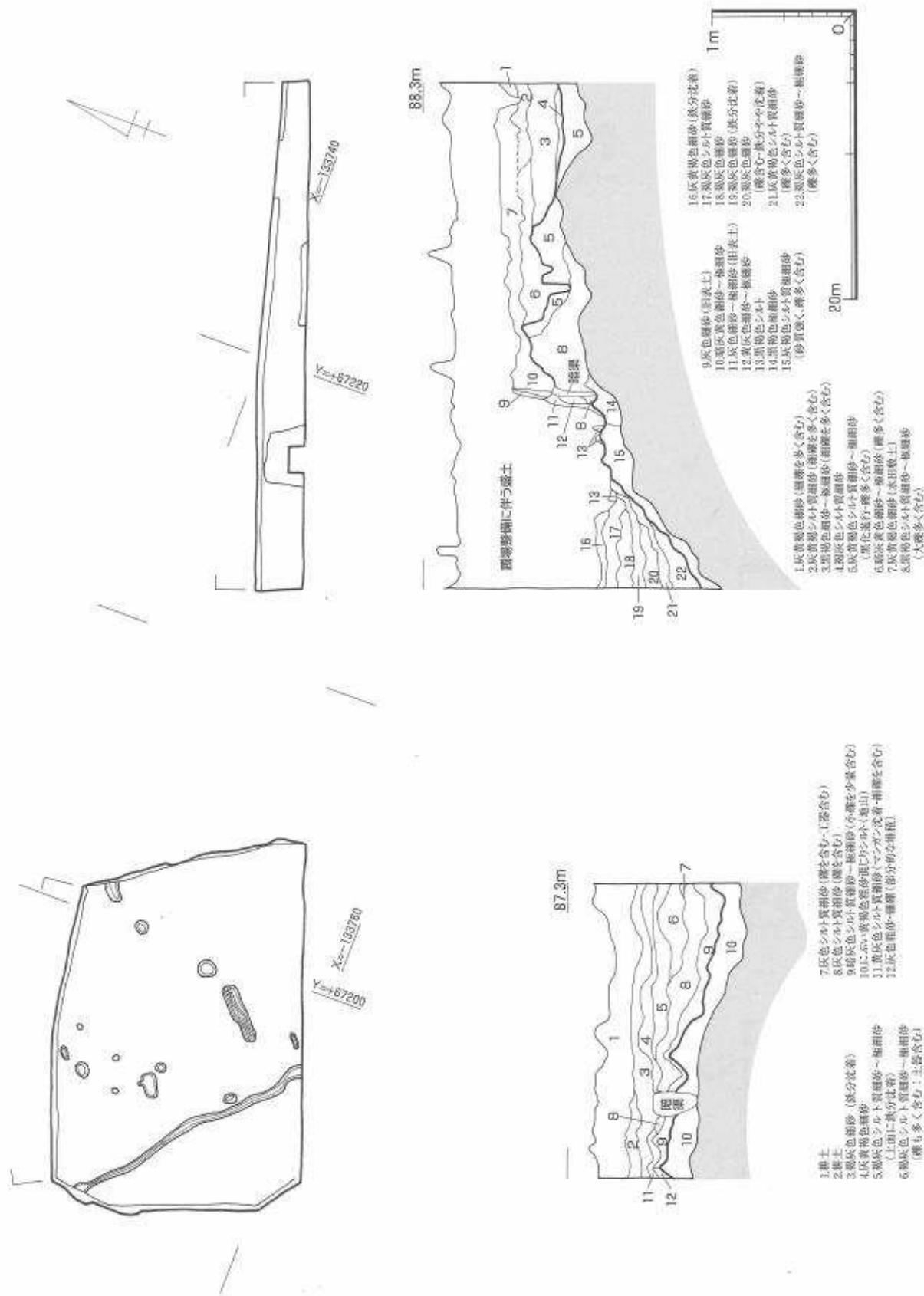
**4区** 1～3区とやや状況が異なっている。調査区内は、ほ場整備前に水田の段差が存在し、この段差の低い側は西側へ大きく傾斜している。そこに複数面の旧水田面が認められ、旧耕土層と酸化鉄が沈着した旧床土層が互層となっている。一方、高い側は堆積がやや不安定な様相を示し、いずれの層にも疊を多く含んでいる。

表2 各調査区概要表

	最延長(m)	最大幅(m)	約面積(m <sup>2</sup> )	遺構面基盤土層の概要
1区	14.0	2.8	39	灰黄色シルト土からなる、ほぼ水平堆積
2-1区	24.0	2.9	69	1区と同質土、西に向かって緩やかに傾斜
2-2区	21.5	5.0	53	2-1区と同様の状況
3区	25.0	17.0	382	にぶい黄褐色粗砂混じりシルト、東に向かって傾斜
4区	35.0	3.1	91	基盤層は複数の土層からなる、西に向かって大きく傾斜
計5地区	総面積		634	



第4図 調査区平・断面図 (1)



第5図 調査区平・断面図 (2)

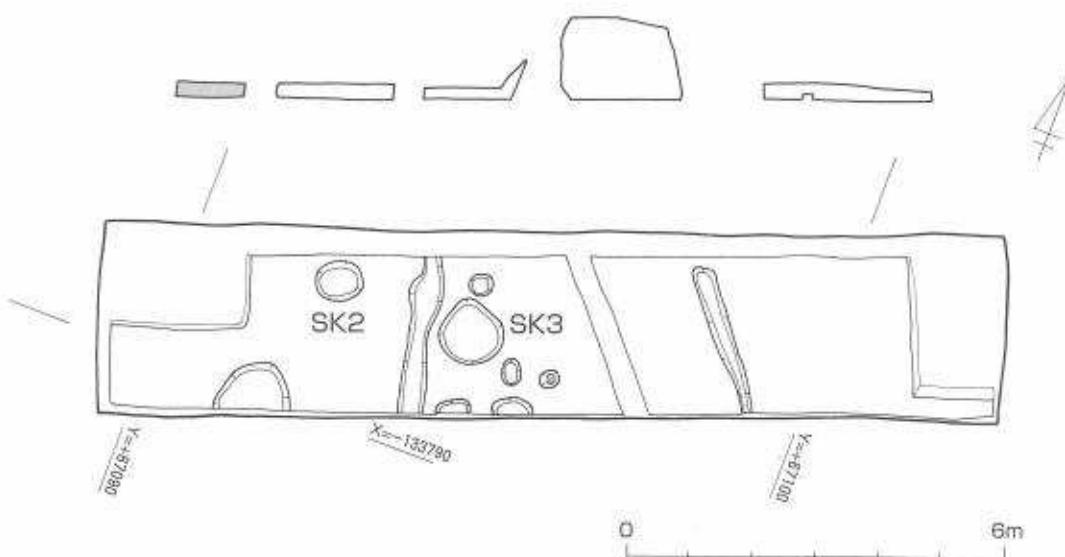
## 第2節 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構の分布は各調査区とも疎らな状況にあったが、そのなかでも2-2区と3区で比較的まとまりのある遺構を確認することができた。1区・2-1区ではピット状の遺構と溝状の遺構をわずかに検出したが、2-2区では浅い土坑状の遺構が中心となる。特に、調査区の西端近くで検出したSK1の内部からは、墨書き土器を含む残存状況の非常に良好な土器（須恵器椀）が一括出土している。また、3区でも炭焼成用の所謂「炭土坑」と考えられる遺構を3基（SK2・SK7・SK10）確認すると共に、須恵器・土師器の椀を包含する土坑SK12を検出した。4区では明確な遺構はまったく検出されなかった。また、全調査区をとおして竪穴住居跡・掘立柱建物跡など集落遺跡の存在を示す遺構は検出されていない。

出土した遺物は、ほぼすべてが土器である。1区・2-1区・4区ではその出土点数が少ないため、図化できた点数もごくわずかな状況にある。2-2区・3区から出土した土器を中心として概観すると、概ね8世紀～9世紀初頭・9世紀後半～10世紀・13世紀前後の3時期に大別することが可能と考えられる。輸入磁器および国産磁器等の出土はまったく認められず、東播磨産の須恵器と土師器によって構成される。上記3時期以外の遺物として、弥生時代に属すると思われる石器の出土を1点確認している。

### A 1区の遺構

本調査区で検出した遺構は土坑あるいは土坑状落ち込み、溝、ピットがある。溝は一方あるいは両方が調査区外へのび、全容は不明である。調査区の制約や搅乱により調査できた部分は限られるが、遺構は調査区中央部付近に集中する傾向が看取できる。ただしここで検出した遺構も特に規則的な配列は見られない。一方、調査区西半部は土坑などが疎らに分布するだけで、調査区東半部は溝以外の遺構は全く検出していない。



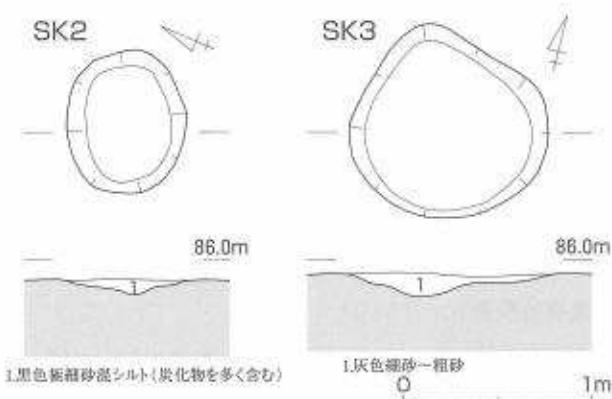
第6図 全体図

## 土坑

土坑はいずれも調査区西半部で検出した。平面形は楕円形を呈するものが多いが、主軸方向は一定ではない。また用途を明らかにしうるものはない。

**SK 2** 調査区西半部、北壁際で検出した。平面形は楕円形を呈する。長径 0.7m、短径 0.6m を測る。断面は浅いすり鉢状で中央がわずかにくぼむ。検出面からの深度は 7 cm である。埋土には炭を多く含んでいる。

**SK 3** 調査区の中央付近で検出した。平面は不整な楕円形を呈する。長径 1.1m、短径 1.0m を測る。断面形は深いU字状を呈する。



第7図 SK 2・3 遺構図

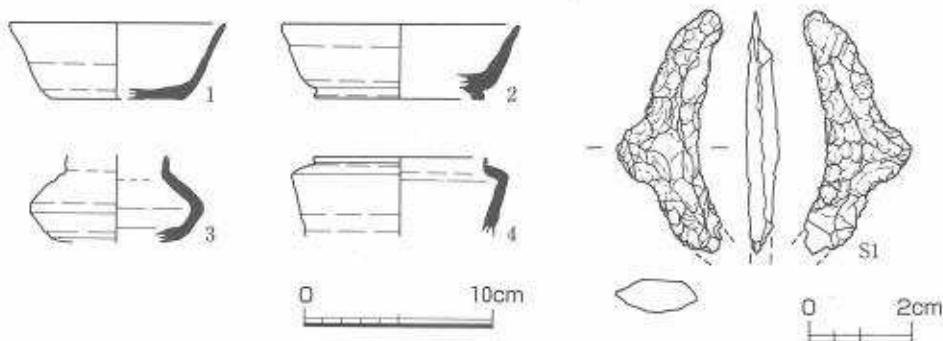
## B 1区の遺物

本調査区から出土した土器はその多くが細片であり、さらに包含層自体が非常に希薄なため、図化できたのは第8図に示す土器4点と石器1点のみである。しかも、遺構内からの出土は皆無であり、そのいずれも包含層からの出土となる。土器はすべてが8世紀前半代に属する須恵器であり、石器は弥生時代に属するものである。

### 包含層出土遺物

8世紀に属する土器には須恵器の杯A・杯B・壺C・壺Eがあるが、土師器はまったく見ることができない。

**須恵器** 杯A（1）・杯B（2）とも器高の深い形態となる。1は口縁部が大きく外反する形態となる。2は体部の器壁が厚く、脚部は短く踏ん張り水平接地する。壺C（3）は口縁端部と底部を欠く。壺E（4）は体部下半部から底部を欠損するため、脚部を伴うかどうかの判断ができない。



第8図 包含層出土土器・石器

## C 2-1区の遺構

本調査区で検出した遺構は土坑、溝、ピットがある。溝は調査区東半部で検出したが、他の遺構は中央から西側にかけて検出した。

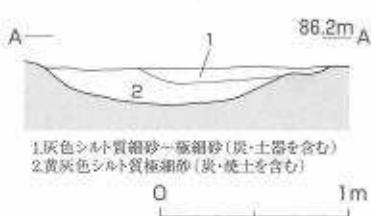
### 土坑

本調査区では土坑は西半部にまとまる傾向にある。土坑の平面形は橢円形を呈するものが多い。

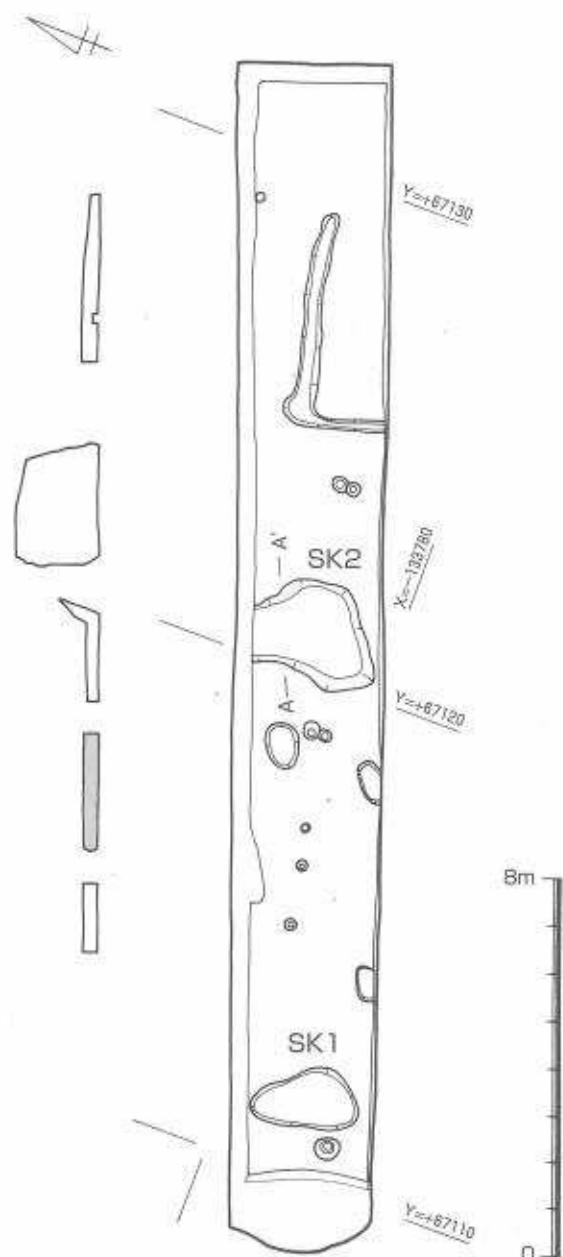
SK1 調査区西端付近で検出した土坑状落ち込みである。平面形は不整な橢円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは8cm程度である。埋土内より複数の土器片が出土しているが、須恵器杯蓋のみ図化した。

SK2 調査区の中央付近で検出し

た。側溝掘削で北端部分を欠く  
が調査区北壁では明確な落ち込  
みが確認できないことから調査  
区内で完結すると考える。平面  
形は不整形であり南側は幅が広  
がっている。上層は炭が混じり、  
土器片も包含するが図化しうる  
ものはない。



第10図 SK2断面図



第9図 全体図

## D 2-1区の遺物

SK1から杯蓋が1点出土する以外はすべて包含層からの出土であるが、1区同様遺物点数は少なく、8世紀に属する須恵器（6～8）と13世紀代となる須恵器（9・10）を含めて6点を図化した。

### SK1出土土器

杯Gの蓋が1点出土する。

**須恵器** 杯G蓋（5）は、天井部と摘み部分を欠損する。口縁部内面のかえりが短くなることから、7世紀末から8世紀初頭に属するものである。

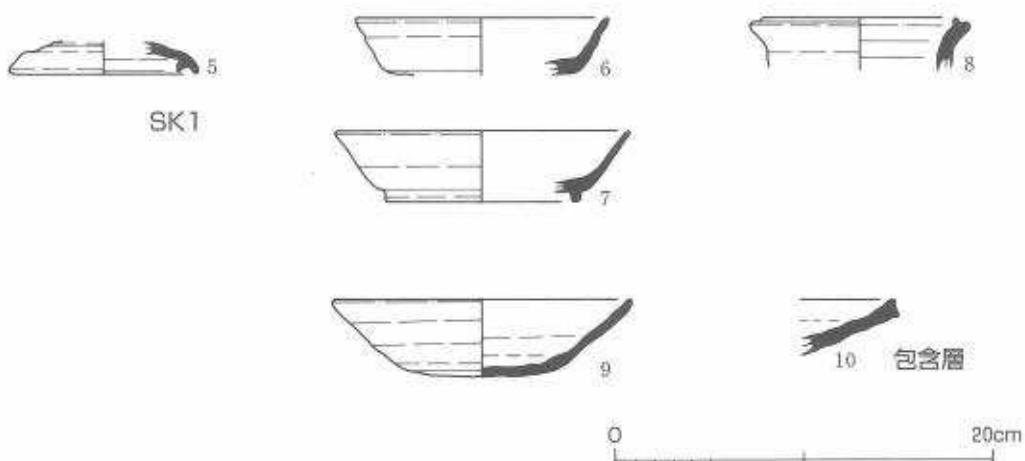
### 包含層出土土器

8世紀代の 杯A・杯B・壺が出土する。

**須恵器** 杯A（6）は器壁が比較的厚く、口縁端部がごく僅かに肥厚する傾向にある。杯B（7）の体部は外反気味となり、脚部はほぼ水平に垂下する形態となる。壺（8）は他に類例を見ない形態であり、外湾した口縁部の端部を小さく内側に摘み上げる。

13世紀代の 梵と鉢の口縁部と思われる土器が出土している。

**須恵器** 梵（9）は体部の長さが比較的長くなり、底部が若干丸みを持つ。底体部境の器壁が薄くなることを特徴とする。（10）は口縁部の外反が著しいため鉢とするには若干問題を残すが、口縁部の形態から鉢とした。焼成は非常に良好であり、堅固な焼き上がりとなる。



第11図 SK1・包含層出土土器



遺構の掘削



真夏の水撒き

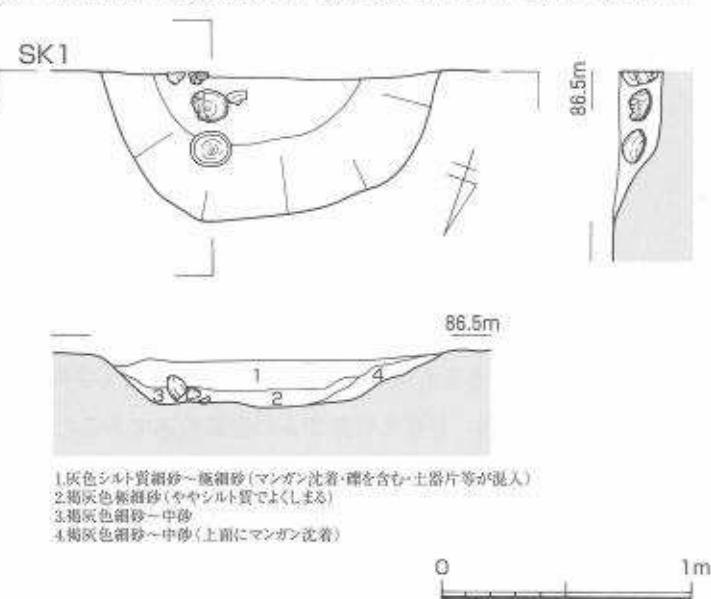
## E 2-2区の遺構

本調査区で検出した遺構は少ない。検出した遺構は土坑、溝、ピットがあり、その他に落ち込みがある。溝、落ち込みともに調査区外へ続くため、その全容については明確にしれない。ピットの中には根石と思われる石を底に入れるものがあり、柱穴の可能性があるものの、掘立柱建物を復元するにいたっていない。

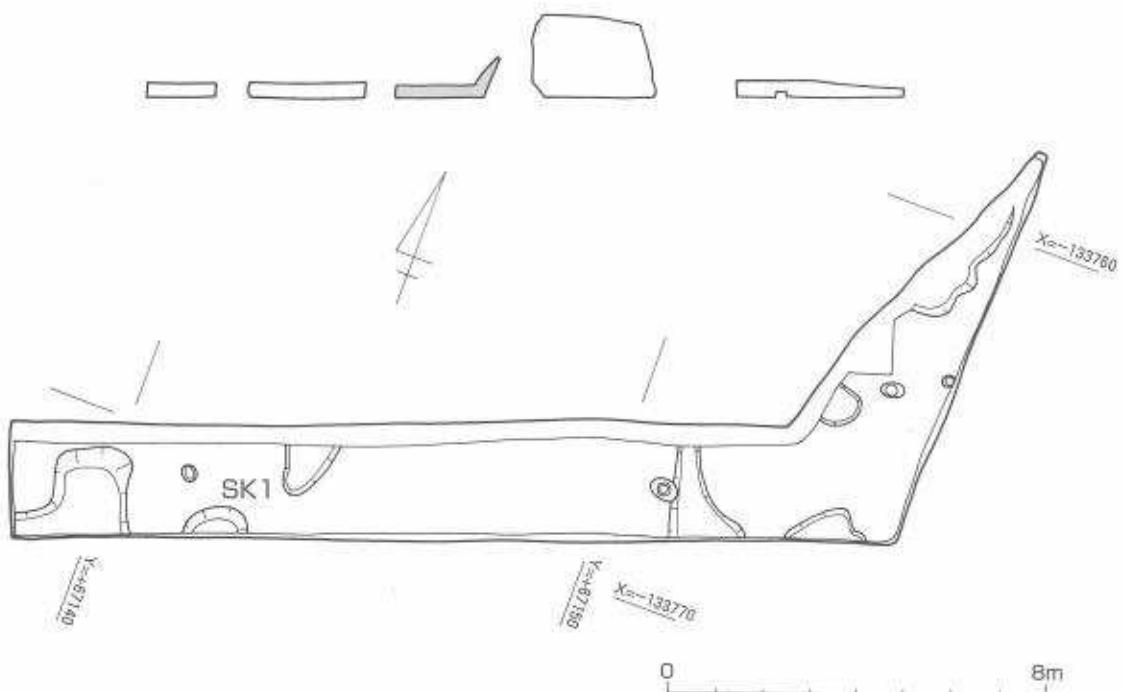
### 土坑

土坑としては、唯一SK1を確認している。

**SK1** 調査区西端付近で検出した。調査区内では遺構の北半部を検出したのみで、さらに調査区の南側へ続いている。  
 したがって土坑の全容は明らかではない。検出できた部分は平面形が半円状を呈し、幅1.3mを測る。断面は逆台形を呈し、底部はほぼ平坦である。検出面からの深さは18cmである。東側の壁面沿いに須恵器碗(11~13)と土師器碗(14)が投入された状態で検出された。



第12図 SK1 遺構図



第13図 全体図

## F 2-2 区の遺物

SK1内より一括遺物として捉えられる12世紀末～13世紀に属する土器が出土している。そのうちの1点には墨書を確認できる。包含層内からの出土土器で図化できたものは2点である。うち1点はSK1出土土器とほぼ同時期の須恵器碗であり、ここにも墨書が記されている。残る1点は16世紀代の丹波焼甕と思われる。

### SK1出土土器

一括性を看取できる須恵器碗3点と土師器碗1点が出土している。

**須恵器** (11～13) はいずれも同一形態の碗であり、体部は若干の内湾を持ちながら大きく外反して開くため、器高指数が小さくなる。口縁端部は僅かに肥厚する傾向となり、底部はまったく高台部分を残さないように底体部境から糸切りする。(13) の底部外面には明確な墨書の痕跡を認めることができるが、残念ながら文字を判読することはできない。

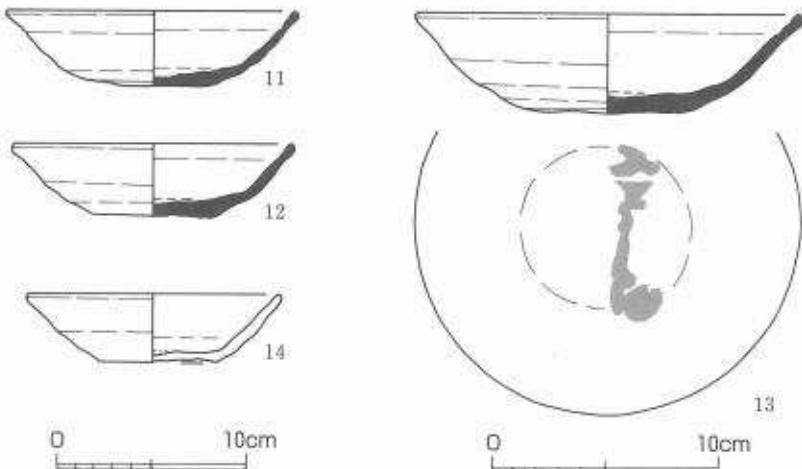
**土師器** (14) は形態的には(12)と類似するが、口径がやや小さくなる。

### 包含層出土土器

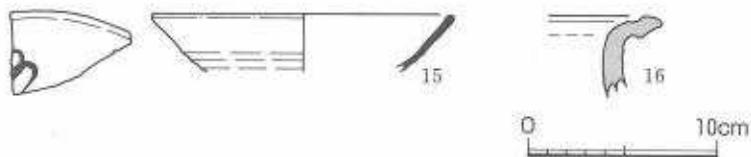
**須恵器** 碗(15)は口縁端部が小さく肥厚するため、(11～13)と同一の形態になるものと推定されるが、底部が欠損するため断定はできない。体部の外面に墨書の痕跡を確認することができるものの、部分的な残存のため文字の判読までには至らない。

**丹波焼** (16)の短く外反する口縁部のみであるため、断面のみの図化とした。口縁端部が断面三角形となり、その上面にわずかな窪みが巡る。

SK1



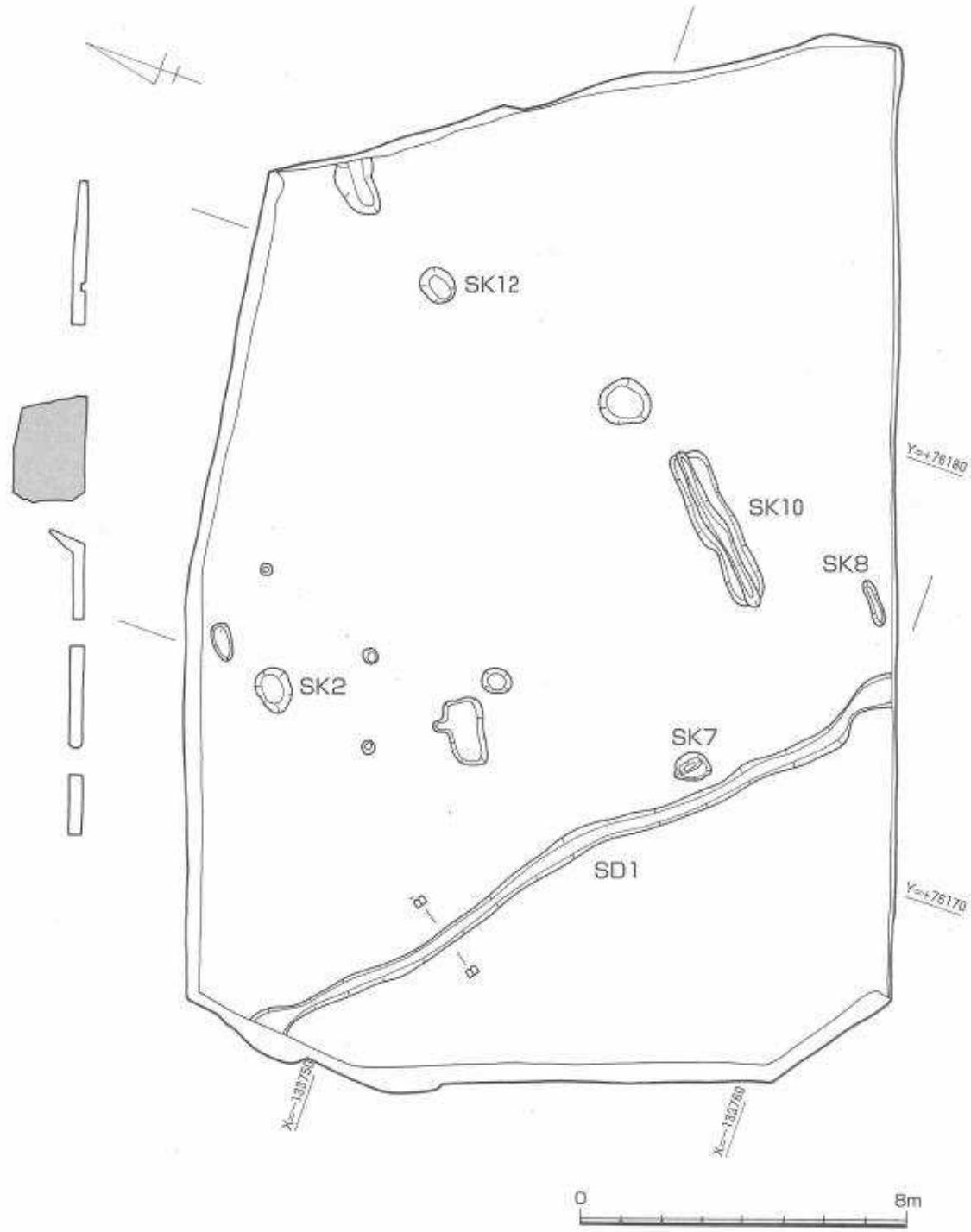
包含層



第14図 SK1・包含層出土土器

## G 3区の遺構

本調査区は今回の調査の中では最も広い調査区であるため、検出した遺構も多い。検出した遺構は土坑、溝、ピットであるが、ピットは調査区北半部で数基が点在するのみで、建物などは復元しえない。



第15図 全体図

## 土坑

本調査区検出の遺構の主体をなす土坑は、調査区の中央付近ではほぼ等高線ののびる南北方向に分布する傾向にあり、東西の端付近にはほとんど分布しない。また遺構の多くは溝が示す北西から南東方向に平行または直交する方向に主軸をもつ。この方向は等高線の方向と斜交する方向であり、遺構が存続した時期の土地区画の方向であったのかもしれない。

また本調査区検出土坑の大半は炭の充満したいわゆる炭土坑であり、その分布は標高82.3m から 82.5m の範囲に限られる。

S K 2 調査区北壁付近で検出した。平面形はやや不整な楕円形で、南西の一角がやや突出したような形状を呈する。主軸を南西から北西にもち長径 1.1m、短径 0.8m を測る。壁面の立ち上がりは緩く、断面形は浅いU字状を呈する。底部は数cmの厚さで炭化物が堆積する。また底部はほぼ全面にわたり粘土を貼っている。

S K 7 調査区中央からやや西側、S D 1 の東側で検出した。3 区検出の遺構では最も西側に位置し、炭土坑のうちでも最も西側に位置している。平面形は不整な楕円形で、北西の一角がやや突出したような形状を呈する。主軸は S D 1 と平行するように、南東から北西にもち長径 0.85m、短径 0.6m を測る。壁面の立ち上がりは緩く、断面形は浅いU字状で、北東側の壁際がわずかにくぼむ形状を呈する。検出面からの深さは 5 cm である。埋土は炭化物が充満している。

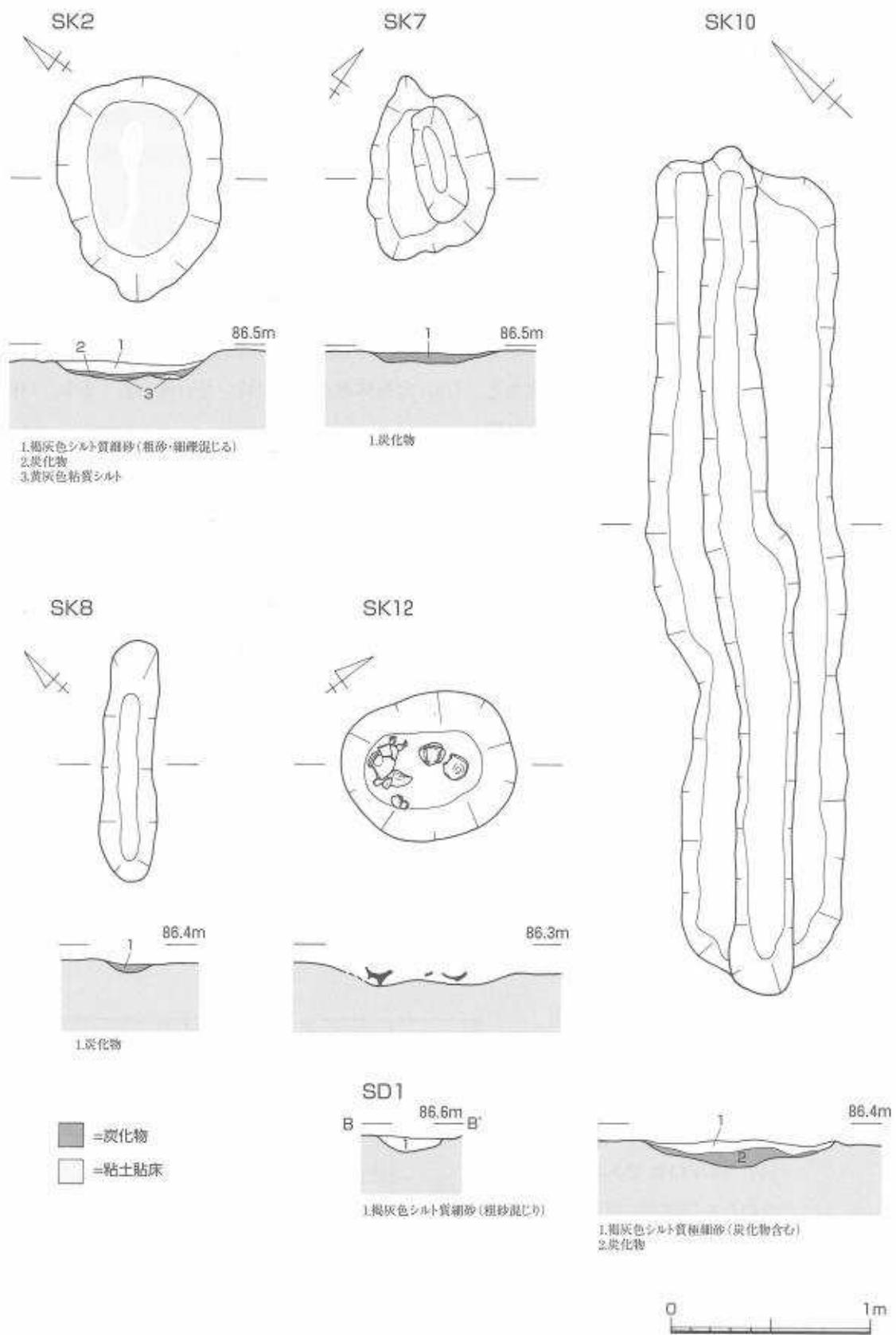
S K 8 調査区南端の中央付近で検出した。溝状を呈し、長さ 1.2m、幅 0.25m を測る。断面形は浅いU字状を呈する。検出面からの深さは 5 cm である。埋土は炭化物が充満し、南東側へ溢れたような状況で検出した。本土坑は、本来は後述する S K 10 と同様の形状のもので、その残欠を検出したと考える。

S K 10 調査区の南半部で検出した。平面形は不整な長方形で、短辺にあたる北東と南西部分がやや突出したような形状を呈する。主軸は S D 1 に直交する南西から北東にもち長さ 4.2m、幅 0.95m、検出面からの深さ 13 cm を測る。壁面の立ち上がりは緩く、断面形は浅いU字状で、底部の中央が溝状にくぼむ形状を呈する。また底部は最大 10 cm 程度の厚さで炭化物が堆積するほか、火熱による変色が広範囲に認められる。

S K 12 調査区東半部で検出した。3 区検出の遺構では最も東側に位置するものである。平面形は南西から北東に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は長径 0.9m、短径 0.75m を測る。壁面の立ち上がりは緩やかであり、断面形は浅い皿状である。検出面からの深さは 5 cm 程度である。底部はやや凹凸がある。底部、特に西半部で土師器杯（17）、台付椀（18・19）、椀（20～22）が出土した。遺物の残存状態は比較的良好だが、規則的に配置した様子は何えない。

## 溝

S D 1 調査区西半部で検出した。本調査区検出の遺構のうち最西端で検出したものである。調査区北西隅から南端へ直線的にのびる。両端とも調査区外へ続いている。検出長約 9 m、幅 0.35m、検出面からの深さ 7 cm 程度である。断面形は浅いU字状を呈する。実測できる遺物は出土していない。



第16図 各遺構図

## H 3区の遺物

S K 12 から土師器 3 点・須恵器 3 点が一括出土しているが、他の遺構内からは図化できる遺物の出土はない。但し、本地区の遺物包含層は今回の調査区の中では最も多くの土器を包含していたため、10世紀代と 12世紀後半から 13世紀代に属する土器が出土しているが、多くは細片となっている。

### S K 12 出土土器

土師器では杯 1 点・台付椀 2 点と須恵器の椀を 3 点出土している。いずれも 10世紀代と考えられるものである。

土師器　杯 (17) は底体部境が丸みを留め、口縁部が外湾する形態にある。(18) と (19) は台付椀であるが、両者を比較すると、(18) は椀体部の器高が低い分台部が長くなり、(19) はそのバランスが逆の形態となる。

須恵器　(20)・(21) は体部が僅かに内湾しながら開き、底部は平高台の痕跡を明確に残すが、見込みの落ち込みはほとんど見られない。(22) は口縁端部が内側に小さく肥厚する。

### 包含層出土土器

(30) の土師器椀を除いてすべてが須恵器であり、椀・片口鉢・小皿・甕等の基本的な器種に限られる。

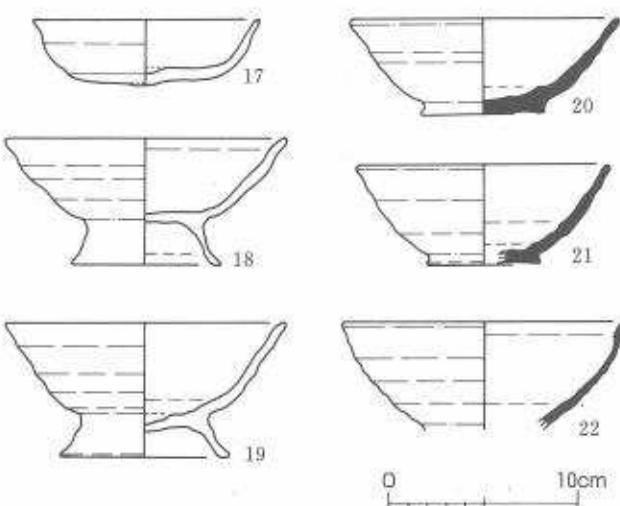
10世紀代の須恵器　(23) は椀として考えたが、器壁が非常に薄く体部の下半が大きく屈曲するため、12～13世紀の杯となる可能性も高い。(24) は低い台付の椀であり、(25)・(26) は平高台底部の椀であり、(25) は見込みの落ち込みが明確となる。(27)～(29) は片口鉢あるいは鉢になるものと考えられる。口縁端部の形態に 3 者とも若干の差違が認められるが、(28)・(29) は細片のため断面だけの図示とした。

10世紀代の土師器　(30) は唯一の土師器資料であり、形態的には平高台底部の須恵器椀と同様になるものと考えられる。ただ、器壁が比較的薄い作りとなるようである。

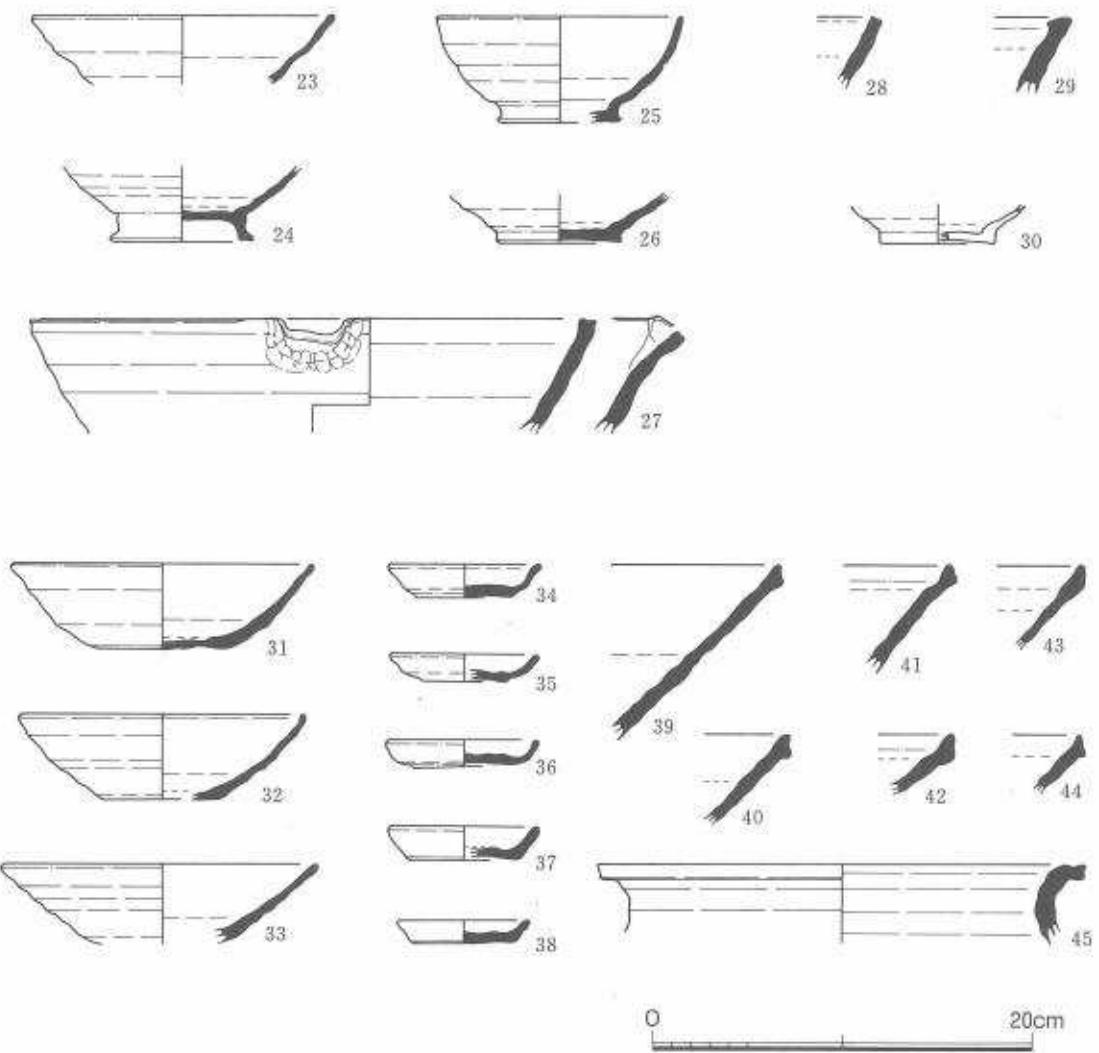
12～13世紀の須恵器　(31)～(33) は椀であるが、口縁端部の形態に若干の違いがあり、(31)・(32) は小さく内湾して納まる。(34)

～(38) は小皿となる。(34)

～(36) は底体部境が丸みを残すが、(37)・(38) は明確な境をなす。(39)～(44) は片口鉢である。細片のため口縁部の断面のみを図化した。口縁端部には 3 形態を看取ることができる。甕は (45) の 1 点のみであり、外湾した口縁部はその端部が水平に短く開く。



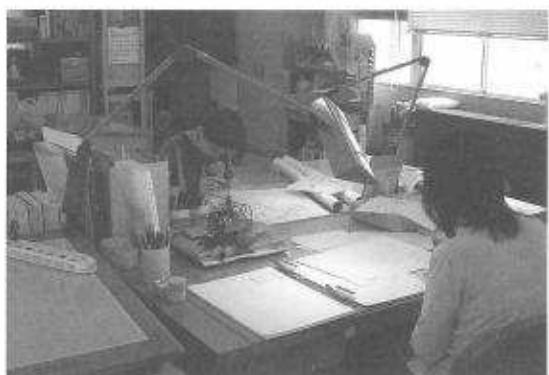
第 17 図 S K 12 出土土器



第18図 包含層出土土器



土器の接合



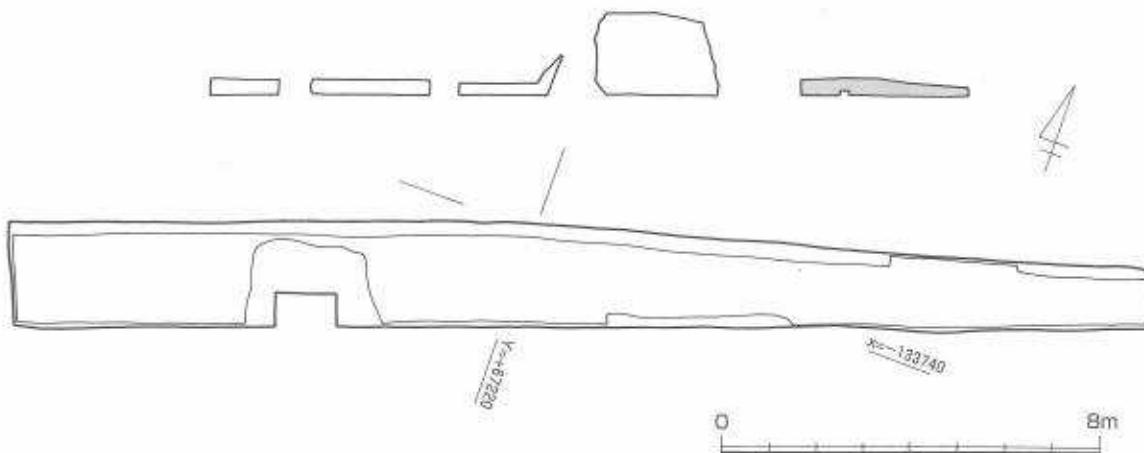
土器の実測

## I 4区の遺構

4区は北側の丘陵部からの張り出しの末端にあたると考えられ、1～3区とは小河川のある谷状地によって隔てられる。現況地形は3区と約1mの比高差をもつが、これはは場整備の盛土によるため本来の地形とは異なる。遺構面は標高87.5m前後で西半部は谷状地へ向かって傾斜している。調査の結果、遺構は若干のピット状の落ち込みが平・断面で検出できたのみである。本地区は戸田遺跡の末端部にあたるものと思われる。

## J 4区の遺物

本調査区では上記のとおりまったく遺構が確認されておらず、それに準じて遺物の出土も希薄な状況にある。西端部の谷状地形の埋土が遺物包含層となるが、包含される土器は数量的にも少ないうえに、かなりローリングを受けた細片ばかりである。従って、図化できる状態の土器はまったく出土していないものの、12世紀～13世紀の須恵器が大勢を占め、それに10世紀の須恵器が少量混ざる状況にある。1～3区で確認された8世紀代と10世紀代に属するもの、あるいは弥生時代と考えられる遺物はまったく看取されてない。



第19図 全体図



谷部の掘削



遺構を記録する

## 第4章 まとめにかえて

今回の調査で本遺跡の性格を端的に示す成果を得るまでには至らなかったが、そうした限られた資料のなかから遺跡の実体に少しでも迫ってみたいと思う。ここで注目を寄せたいのが、所謂「炭土坑」と呼ばれている土坑状の遺構である。本遺跡の場合にも、3区においてSK2・SK7・SK8・SK10と4基が確認されている。先学の研究や周辺で確認されている類例を参考としながら、若干の考察を加えてみたいと思う。

### A 所謂「炭土坑」について

#### 研究略史と型式の分類

3区で検出した4基の土坑は一般的に「炭土坑」と称されている遺構であり、過去においても同様の遺構を「窯状遺構」・「焼成遺構」・「焼土坑」・「炭溜り土坑」あるいは単に「土坑」や「SK」・「SX」などと様々な呼称が用いられているが、未だ確定的な名称がない状態にある。そこで、ここでは一応「炭土坑」の呼称を用いることとするが、上記した諸例からも分かるとおり、その内部が炭あるいは炭化物で充填した形態で検出される土坑を指すものであり、平面形態的には円形・方形・長方形・不定形のものがみられる。

研究的には、同遺構が注目され始めた1971年には中村浩氏が、1980年には野上丈助氏が須恵器の窯跡に付随するように構築されることから、土器の焼成遺構として問題提示をされたことから始まる。1978年に河内長野大師山遺跡の調査から、一般的燃料用炭の焼成遺構とする見解が藤原学氏によって示され、水谷寿克氏は当時の資料分析の中から、土器焼成用の燃料を生産するための木炭窯とする考えを示された。兵庫県下では明石川下流域で同様の遺構が多く確認されるようになり、遺構内埋土の脂肪分析の成果を踏まえて、農民による農閑期副業の炭焼き遺構とする神崎勝氏、炭の生産以外に墨の製造窯の可能性を指摘する村尾政人氏や、山間部における一般的な生業活動の一環としての炭生産とする高木芳史氏等をはじめとする論考・研究がなされた結果、現在では全般的な傾向として「炭生産用の窯遺構」としての見解で落ち着く方向にある。

次に、その型式分類については上記の各氏によって分類が行われているが、大別的にはその平面形態が分類の基本となっており、円形あるいは不定円形を呈するもの、方形となるものさらに長方形(椭円形含む)の3類となるようである。さらにその他に突出部やピットの有無、床面構造の違いにより細分がされている。今回検出したSK10は坑底の中央部に溝が伴うことから、松尾氏の6類に分類されるものであり、土坑体がかなり長くなるため、長方形平面のAタイプとして復元することが可能と考えられる。SK8は同タイプの溝の一部が遺存したものと想定される。SK7は円形状に遺存しているが、坑底に貼り付けた粘土の僅かの遺存状況から、本来的には上記2例と同様に長方形平面を呈していたことが復元される。残るSK2は溝状構造をまったく留めないことから、円形平面のCタイプと考えたい。以上見てきたように、本遺跡3区検出の炭土坑は円形平面タイプがSK2の1基であり、有溝長方形タイプがSK7・8・12の3基から構成されていたこととなる。

### 新たな視点からの観察

3類に大別される土坑のうち比較資料が多く見られ、形態変化が捉えやすい長方形平面形態のものについて検討を加えた。対象としては、遺構図の入手が可能であった12遺跡・40例を資料として取り扱う。各遺構の詳細については、表4のとおりである。

根本的に基本的な構造が簡易な遺構であるため、その検討に当たっては比較的構造変化を看取ることのできる長方形形態のものを取り上げて行った。この形態の遺構について村尾氏は長方形平面形 → 隅丸長方形平面形へと変化し、その変化は“衰退”を意味するものとされておられるが、隅丸形態と衰退との因果関係を十分に理解することができないため、ここでは生産の効率性を具現化したところに形態的な変化が現れるものと考え、土坑自体の地形に対する「方向」と小口部に取り付く「突起部」の状況から、その傾向を概観したい。

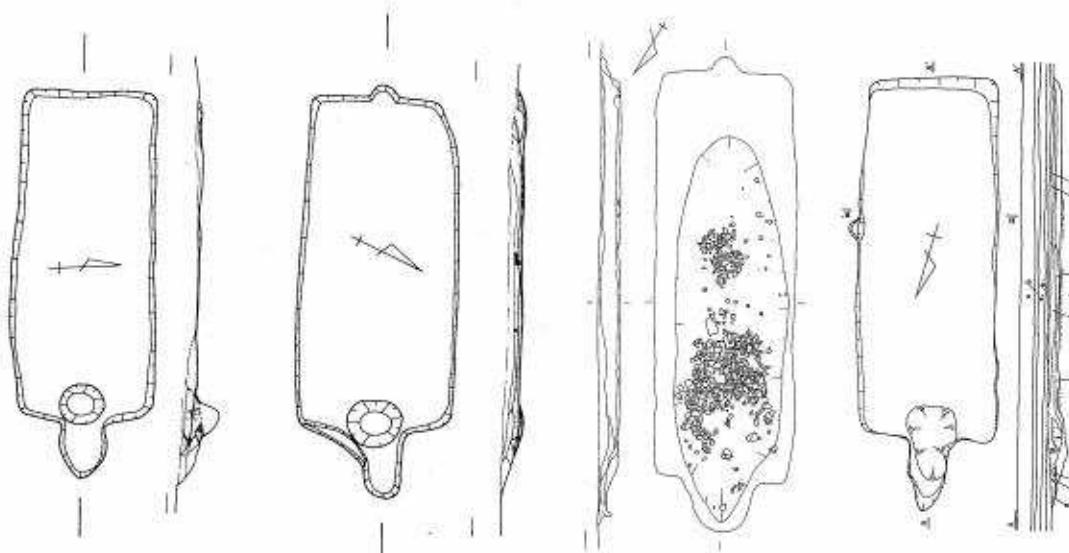
表3 炭土坑一覧

	遺跡名	No	遺構名	平面形態	突出	向き	突起方位	床面レベル	備考
1 前開遺跡	1 SK 01		隅丸長方形	1	並行	東	水平		
	2 SK 02		長楕円形	1	並行	東	水平(突出部高い)		
2 長谷遺跡	3 SK 03		長方形	1	—	東	水平	突出部に落ち込みあり	
	4 SK 04		長方形	2	—	東・西	水平	突出部に落ち込みあり	
	5 SK 09		長楕円形	1	—	東	擂鉢状	突出部に繋がる	
	6 SK 20		長方形	2	—	東・西	水平		
	7 SK 01		長方形	1	—	—	—	明らかに焚き口構造	
	8 SK 02		半円+方形	1	—	—	—		
	9 第2土坑		長方形	1	直交	北(谷側)	—	煙突の可能性あり	
	10 第5.6.8土坑		不定円形						
4 神出・東遺跡	11 焼成土壤A		長方形	2	直交	北(谷側)・南	水平	覆土に11C後半~12C前半の須恵器	
	12 焼成土壤B		長方形	0	直交	**	谷側やや深い	谷側に焼き出しらしき痕跡あり	
	13 焼成遺構		長方形	1	直交	北(谷側)	水平	突出部に落ち込みあり	
	14 SX 01		長方形	1	直交	北(谷側)	—		
5 白沢故山遺跡	15 SK 01		長楕円形	0	直交	**	—(傾斜?)	白沢6号窯近接	
	16 SK 02		長楕円形	1	直交	南(谷側)	—(傾斜?)	突出部とならない可能性ありか	
	17 SK 04		隅丸長方形	0	直交	**	—(傾斜?)		
	18 SK 06		長方形	1	直交	南(谷側)	—(傾斜?)		
	19 SK 03		円形						
6 与呂木遺跡	20 土坑1・2		円形						
7 西神N.T.内 第65地点遺跡	21 SX14		長楕円形?	1	直交	北(山側)	—		
	22 SX12		長方形	1	並行	北(＊)	—	床面が良く焼ける	
	23 SX15		長方形	1	並行	西	—	僅かに突出する。SX17と同時期	
	24 SX17		長方形	1	並行	東	—	SX15と同時期	
8 垂水・日向遺跡 第10次	25 SK 01		長方形	1	直交?	北(山側)	—	ほとんど水平遺構面?	
	26 SK 02		長方形	2	直交?	北・南(谷側)	—		
9 中津原遺跡	27 炭土坑1		隅丸長方形	1	並行	南(山側)	水平	埋土の上層から13Cの瓦器碗出土	
	28 炭土坑2		長方形	1	並行	南(山側?)	水平		
10 大森谷遺跡	29 土壤		長方形	1	並行	北	水平		
11 戸井町坪遺跡	30 SK 02		長方形	1	並行	北(谷側)	水平		
	31 SK 03		長方形	0	並行	**	水平		
	32 SK 06		長方形	1	並行	西(山側)	突出部側にやや傾斜		
	33 SK 04		長方形?	1?	直交	西(山側)	傾斜	近現代炭窯に近接	
	34 SK 08		長方形	1	直交	南(山側)	突出部側に傾斜		
	35 SK 07		半円+方形	0	直交	**	水平		
	36 SK 05		楕円形						
12 戸田遺跡	37 SK 7		長方形?	—	直行	—	やや傾斜	通気溝のみ残存か、坑底に粘土あり	
	38 SK 8		長方形?	—	直交	—	やや傾斜	通気溝のみ残存か、坑底に粘土あり	
	39 SK 10		長方形	2?	直交	東・西(谷側)	やや傾斜	坑底に粘土を貼り付ける	
	40 SK 2		円形?						

## 土坑の方向性

まず窓本体の地形に対する構築の方向性についてみると、基本的に地形傾斜に直交するものと並行するものになる。並行するものについても厳密に言及すれば、完全に地形の等高線に並行するものではなく若干の傾きをもっており、次の「突起部」との関連からも意図的にそのように配されたものと考えられる。さらに、わざわざ直交する方向に設けたにも関わらず、その床面がほとんど傾斜しない構造となる。当然並行する配置のものも同様な状態にあることから、機能上床面の傾斜を極端に嫌う性格の遺構であることが知れる。この点が、本遺構の性格を考える上で最も重視しなくてはならない点であろう。

次にその方向性からみた分布の傾向であるが、表4に示すとおり遺跡毎に方向性が保たれていることが分かる。例えば、前開遺跡・中津原遺跡は並行方向の土坑のみで構成される（大森谷遺跡もここに含まれる）。西神N.T.内第65地点遺跡はS X 14が直交方向となるが、他の3例は並行方向となるため、このグループに含まれるものと考えたい。一方、直交方向の遺跡には溝口遺跡・神出・東遺跡・白沢放山遺跡・垂水・日向遺跡・戸田遺跡がある。遺跡毎に構築の方向性がみられることから、ある一定の規範に沿って遺跡単位で構築されたことが伺える。この方向性の違いを時期差によるものと考えると、神出・東遺跡の焼成土壙Aが11世紀後半～12世紀前半の須恵器を含む覆土で覆われていること、戸田遺跡のSK群が13世紀の土器を含む包含層の下層で検出されていること、さらに中津原遺跡の炭土坑1の埋土上層から13世紀の瓦器碗が出土したこと等から類推して、12世紀前半以前には地形に直交する土坑の構築を行い、それ以後には並行する構築が行われたものと考えられる。その両者が相半ばする戸井町坪遺跡は、その過渡期に操業されていたこととなる。



第20図 突起部をもつ炭土坑の類例

(左側2列は「西神中央線長谷遺跡」/ SK 03とSK 04、右側2列は「神出・東遺跡」/  
焼成土壙 Aと焼成遺構)

S = 1/80

### 突起部構造

従来、この突起部については煙突としての機能を考える傾向が強かったように見受けられるが、前記したとおり、地形等高線に並行配置する土坑においても主軸の方向に若干の傾きを看取できることから、その山側に取り付くものは煙突として考えるべきであろうが、谷側にくるものには必然的に煙突とするには無理があり、別の用途を考える必要がある。典型的な例を長谷遺跡のSK04と神出・東遺跡の焼成土壙Aにみることができる。両者とも両端部に突起部をもつ形態であるが、山側となる突起が小さく、谷側が比較的大型となる。さらに、山側の小口壁が鈍角（直角に近く）に立ち上がるのに対し、谷側の突起部はかなり緩やかな傾斜となる。

こうしたことから、小型で山側となるものが煙突となることが判断できる。長谷遺跡SK04の例では、煙突でない側の突起部床面に落ち込みを伴うことから、同様の形態となる同遺跡SK03の突起部も煙突でないこととなる。同様の突起部は神出・東遺跡の焼成遺構にもみられ、北向きの谷側の位置となっている。従って、大森谷遺跡の土坑・前開遺跡のSK01のように片側突起形態の遺構にあっても、それが地形のどちらに位置するかによって、煙突か否かの判断が可能となる。煙突とならない突起部の具体的な機能については、その形状・形態的な特徴から、焼成された炭の掻き出し口あるいは土坑内への空気の取り込み口等の機能を考えることが可能ではないかと思われる。また、本遺跡のSK8・10・溝口遺跡の第4土壙のように坑底に溝を設けるタイプのものは、土坑内への吸気あるいはその排気の効率化を図った構造とも考えられる。

### その生産活動を考えた場合

長方形平面の炭土坑を炭生産用の窯として位置付けた場合、地形への直交方向の構築（直交設置形）から並行方向（並行設置形）への変化は、12世紀中葉を境とした窯構築方の変化によるものと判断されるが、その変化の主因は社会的な需要の増大に伴うものではないかと想定される。高木氏がいうとおり窯の規模（長さ）は一度に焼成できる炭の量と直結するものである。地形に直交する窯構築では必然的にその長さが制約を受け、必要とする規模を確保することが困難となる。そこから並行する構築の窯へと構築の中心が移行したのであろう。

また、水谷氏は窯状遺構（上記した長方形平面形態）を白炭製造用窯とされ、円型焼土坑を黒炭製造用とされておられるが、そこで生産される炭の質に関しては未だ具体的な意見を持ち合わせていない。ただ、長方形平面形態の土坑には表4に示すとおり、突起部との組合せにより5種類程度の型式を抽出することができる。両側に突起部を持つものは直交方向に構築された遺構に限り、まったく持たないものも直交方向のものが大半を占める。突起部が一方のものは両タイプ



第21図 坑底に溝状構造をもつ  
炭土坑（溝口遺跡 / 第4土壙）

にはほぼ同数となることから、この組合せが基本的な形態となることが知れるが、それが上記した煙突と掻き出し口・空気取り入れ口のいずれとして設けられているかをみると、直交設置形は両者が同数となるのに対し並行設置形では煙突として設けられるケースが多数を占める。

こうした窯構造の違いは、必然的に焼成効率の違いをもたらすものであり、ひいてはその製造品の質の違いに反映されることとなる。今ひとつ勉強不足であり、その違いによりどのような製品としての炭が製造させるのか、もしくはまったく製品上の違いではなく、生産効率の違いをもたらすだけのものなのか、その結論を導き出せていない。

## B 戸田遺跡のすがた

戸田遺跡の実像を復元したいと試みたが、今回の発掘調査で得られた資料があまりにも少ないため、かなり困難な状況にあったといえる。そうした中でまず第1に明らかになったのが、本遺跡は直径50m程度を範囲とする極小規模な集落遺跡であるという点である。そのうえ、今回の調査区は集落跡の北辺部分の一部にあたるため、このように遺構が非常に少ない結果となったようである。

第2点目は、2-2区のSK1から出土した墨書き土器の存在である。13世紀前半代における本遺跡の性格を端的に示すものであるが、その継続期間は非常に短く、その後につづく遺構・遺物の存在を確認することはできていない。従って、墨書き土器を伴っていながら遺跡の具体的な性格を明示できないのが現状である。

第3点は、3区で検出した「炭土坑」である。本遺構は先例と同様その所属時期を明確にすることはできていないが、土坑の検出面を覆う包含層内の土器の時期から判断して、13世紀前半の2-2区SK1に先行する時期に構築されたものと考えることができる。本遺跡の場合にも、同時期の遺構がまったく確認されていないため、「炭土坑」は単独で存在していたことが想定される。本遺構が炭焼成土坑とすると、その原材料となる木材を求めるため、あるいは燃焼の際の人家への延焼の危険を回避するために、人里から距離を置いた山間部あるいは山裾部に造られるものであったことが知れる。逆の視点から見れば、この時期の本調査区にはヒトの居住が無かったことの傍証ともいえる。

このように概観すると、各時期毎の本遺跡の情景は非常に閑散とした状態が繰り返されていたことが想起される。第2章第2節で述べたように、淡河川に沿って形成された谷部に点在する小規模な遺跡の実態を、本遺跡にみることができるのでないかと考える。

最後に

本遺跡の発掘調査の実施及び本報告書の作成にあたり、ひょうご情報公園都市建設事務所・三木市をはじめとする各関係機関の方々に多大なご理解とご協力を頂き、無事完了するところとなりました。また、同市教育委員会の小網豊主事には、現地における確認調査結果との照合及び周辺における発掘調査成果についてのご教授も合わせて頂きました。

関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。

\*挿図は各遺跡調査報告書にもとづく。

表4 土器観察表

## 1区出土土器

No	器種	種別	出土遺構	口径	器高	指數	焼成	色調(内/外)	ロクロ	整形・調整	備考
1	杯B	須恵器	包含層	12.4	4.0	32.3	良好	灰/灰	右回転	体部内外面ともヨコナデ	
2	杯A	須恵器	包含層	11.2	4.1	36.6	やや良	灰/灰	右回転	体部は内外面ともヨコナデ、底部はヘラキリ	
3	壺C	須恵器	包含層	9.0	—	**	良好	灰/灰	右回転	体部は内外面ともヨコナデ	
4	壺E	須恵器	包含層	—	—	**	良好	灰白/灰白	右回転	体部背面下部は回転ヘラケズリ、底部はヘラキリ後ナデ	

## 2-1区出土土器

No	器種	種別	出土遺構	口径	器高	指數	焼成	色調(内/外)	ロクロ	整形・調整	備考
5	杯G	須恵器	SK 1	9.6	—	**	良好	灰/灰	右回転	内外面ともヨコナデ、天井部は回転ヘラケズリ	
6	杯A	須恵器	包含層	12.4	3.1	25.0	やや良	白灰/灰	左回転	体部は内外面ともヨコナデ、底部はヘラキリ	
7	杯B	須恵器	包含層	15.4	3.8	24.7	良好	灰/灰	右回転	体部は内外面ともヨコナデ	
8	壺	須恵器	包含層	10.0	—	**	良好	灰/灰	右回転	外面と口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はヘラケズリ後ヨコナデ	
9	椀	須恵器	包含層	15.7	4.1	26.1	良	灰/灰	右回転	体部は内外面とも回転ナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	
10	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	—	良好	灰/灰白	右回転	内外面とも回転ナデ	

## 2-2区出土土器

No	器種	種別	出土遺構	口径	器高	指數	焼成	色調(内/外)	ロクロ	整形・調整	備考
11	椀	須恵器	SK 1	15.2	4.0	26.3	良	青灰/青灰	右回転	体部は内外面ともヨコナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	
12	椀	須恵器	SK 1	14.6	3.9	26.7	良	灰/灰白	右回転	体部は内外面とも回転ナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	
13	椀	須恵器	SK 1	14.9	4.0	26.8	良	灰/灰白	右回転	体部は内外面とも回転ナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	底部外面に墨書
14	椀	土師器	SK 1	13.3	3.5	26.3	良	浅黄橙/灰白	右回転	体部内外面は回転ナデか、見込みは不明、底部は糸切り	
15	椀	須恵器	包含層	15.6	—	—	良	灰白/灰白	右回転	体部はない内外面とも回転ナデ	体部外面に墨書
16	甕	丹波焼	包含層	—	—	**	良好	緑/耐熱-灰		内外面とも回転ナデ	外面に釉が付着

## 3区出土土器

No	器種	種別	出土遺構	口径	器高	指數	焼成	色調(内/外)	ロクロ	整形・調整	備考
17	杯A	須恵器	SK 12	11.9	3.5	29.4	良好	浅黄橙/灰白	右回転	体部内外面とも肩難のため調整不明、底部はヘラキリの後ナデ	
18	椀	土師器	SK 12	14.6	6.7	45.9	良	浅黄橙/橙	**	体部は内外面ともヨコナデ、底部はナデか	
19	椀	土師器	SK 12	14.6	7.1	48.6	良	淡黄橙/淡黄橙	—	体部は内外面ともヨコナデか、底部はナデ	
20	椀	須恵器	SK 12	14.0	5.0	35.7	あまり	黄灰/灰白	右回転	体部は内外面ともヨコナデ、底部は糸切り	
21	椀	須恵器	SK 12	13.2	5.3	40.2	良	灰白/灰白	右回転	体部は内外面ともヨコナデ、底部は糸切り	
22	椀	須恵器	SK 12	14.6	—	—	良好	灰/灰白	右回転	体部の内外面はヨコナデ	
23	椀	須恵器	包含層	15.8	—	—	良好	灰/灰白	右回転	体部外面と内面上半はヨコナデ、内面下半はナデ	
24	椀	須恵器	包含層	—	—	—	良好	灰/灰	右回転	体部の内外面はヨコナデ、見込みと底部はナデ	
25	椀	須恵器	包含層	15.8	5.7	36.1	良好	灰/灰白	右回転	体部内外面はヨコナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	
26	椀	須恵器	包含層	—	—	—	良	灰白/灰	右回転	体部内外面と見込みはヨコナデ、底部は糸切り	
27	片口鉢	須恵器	包含層	28.4	—	**	良好	灰白/灰	右回転	体部の内外面はヨコナデ	
28	鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良好	灰白/暗黄	右回転	内外面ともヨコナデ	
29	鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良好	灰白/灰	右回転	内外面ともヨコナデ	
30	椀	土師器	包含層	—	—	—	良	淡赤橙/淡赤橙	—	表面剥離のため調整不明	
31	椀	須恵器	包含層	15.8	4.6	29.1	良好	灰白/灰	右回転	体部内外面は回転ナデ、見込みナデ、底部は糸切り後ナデ	
32	椀	須恵器	包含層	15.0	4.6	30.7	良好	白灰/灰	右回転	体部は内外面とも回転ナデ、底部は糸切り	
33	椀	須恵器	包含層	16.5	—	—	良	灰白/灰白	右回転	体部内外面とも回転ナデ、底部は糸切り	
34	小皿	須恵器	包含層	7.9	1.8	22.8	良好	灰/灰	右回転	体部内外面・見込みは回転ナデ、底部は糸切り	
35	小皿	須恵器	包含層	7.8	1.4	17.9	良	暗灰/灰白	右回転	体部内外面・見込みは回転ナデ、底部は糸切り	
36	小皿	須恵器	包含層	7.9	1.4	17.7	やや良	暗灰/灰白	右回転	体部内外面・見込みは回転ナデ、底部は糸切り	
37	小皿	須恵器	包含層	7.8	1.9	24.4	良	灰/灰白	右回転	体部内外面・見込みは回転ナデ、底部は糸切り	
38	小皿	須恵器	包含層	6.9	1.2	17.4	良	灰白/灰白	右回転	底部がない外面とも目撃ナデ、見込みはナデ、底部は糸切り	
39	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰	右回転	体部内外面は回転ナデ、内面の下半に使用による摩滅痕あり	
40	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰白	右回転	体部内外面とも回転ナデ	
41	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰	右回転	体部内外面とも回転ナデ	
42	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰	右回転	体部内外面とも回転ナデ	
43	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰白	右回転	体部内外面とも回転ナデ	
44	捏鉢	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰/灰	右回転	体部内外面とも回転ナデ	
45	壺	須恵器	包含層	—	—	**	良	灰白/灰	右回転	口縁部は内外面とも回転ナデ	

「網目」：復元口径、「—」：測定不能、「\*\*」：指數不要 を示す

# 写真図版





遺跡の遠景（西から）



遺跡の遠景（北から）



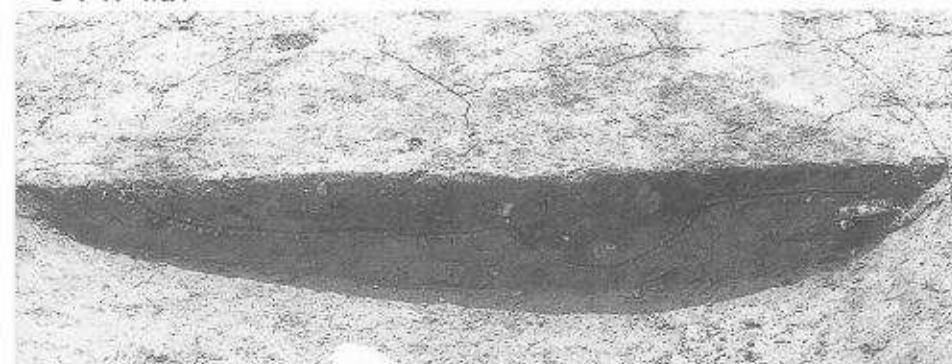
調査区全景（東から）



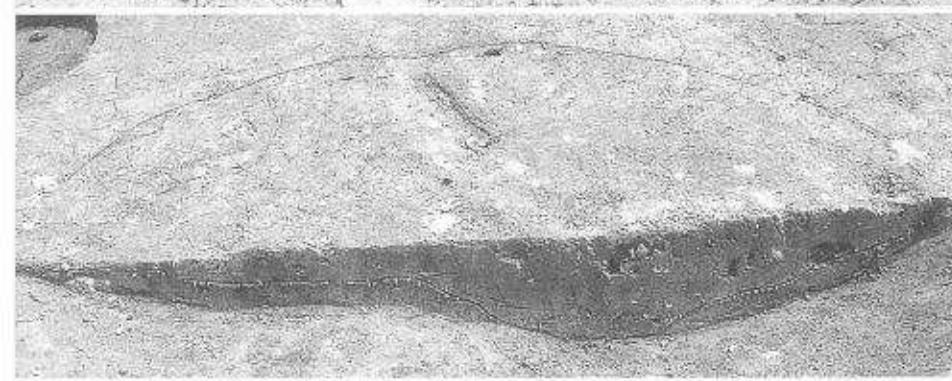
調査区全景（垂直写真）



## 写真図版2



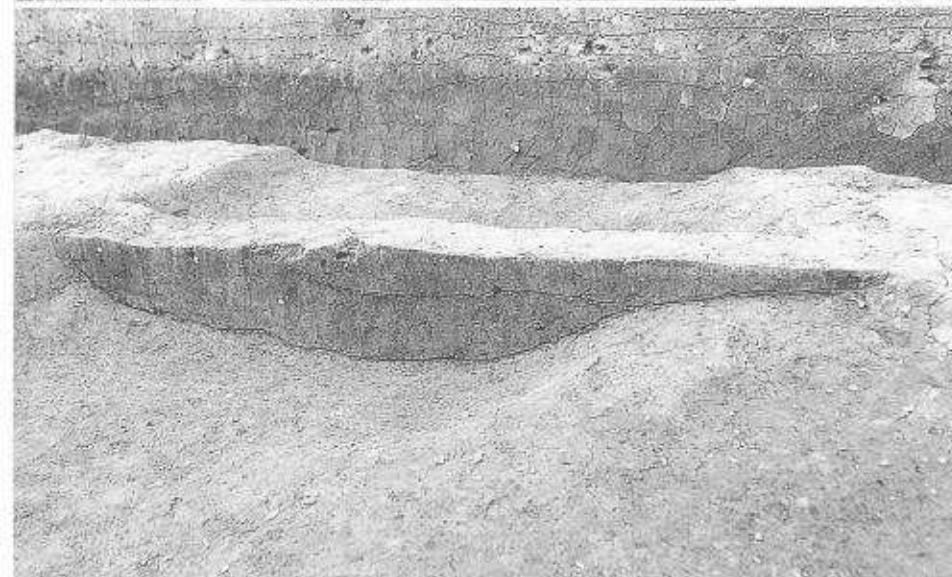
1区  
SK2断面（東から）



1区  
SK3断面（北から）



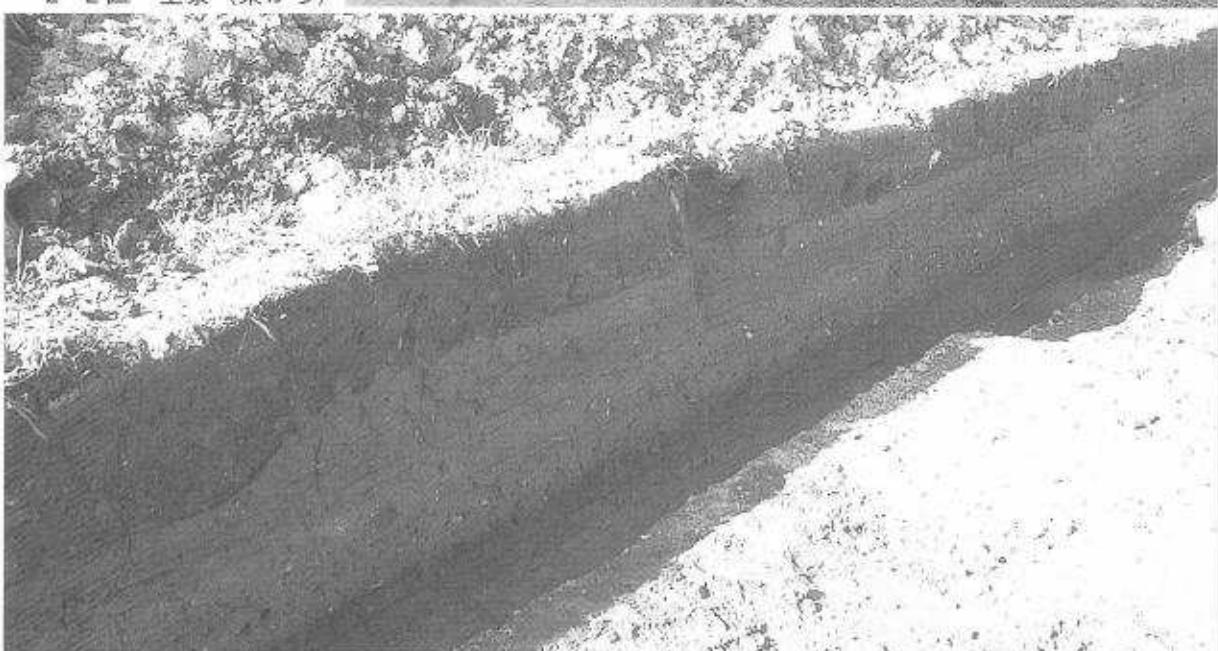
2-1区 全景（西から）



2-1区  
SK2断面（南から）



2-2区 全景（東から）

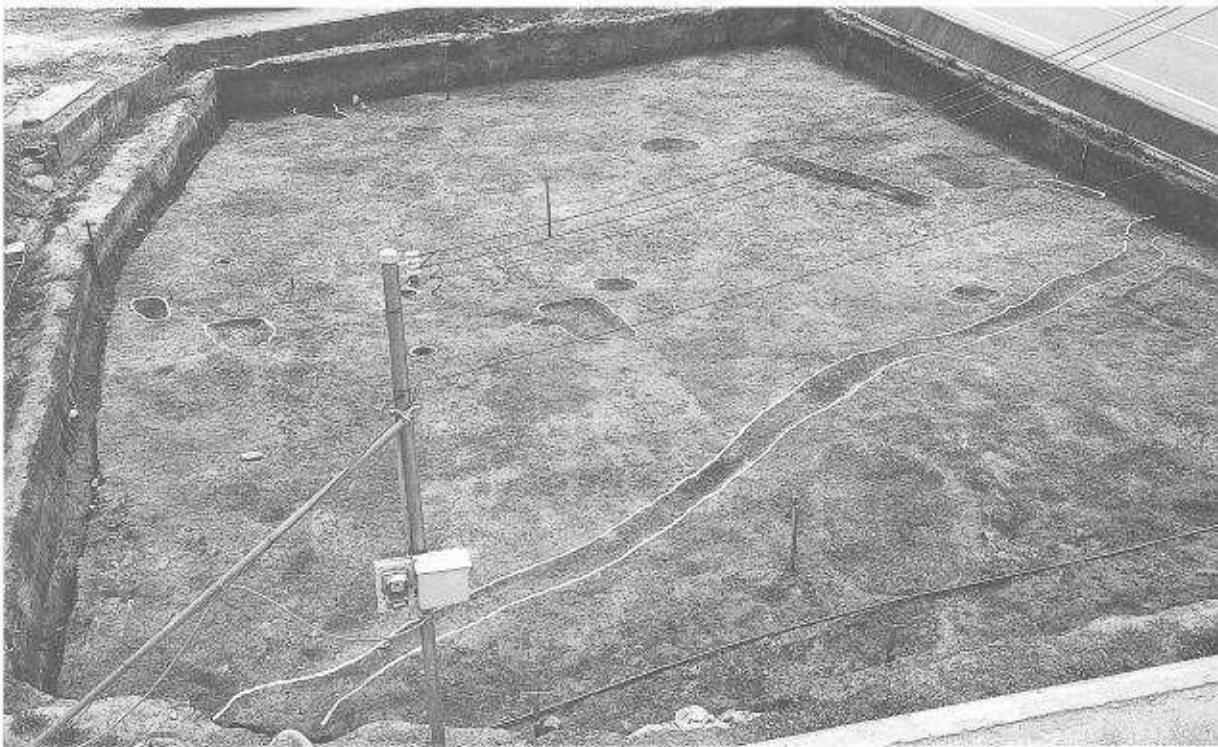


2-2区  
北壁断面（南西から）



2-2区  
SK1（北から）

## 写真図版 4



3区 全景（西から）



3区  
北壁断面（東から）



左) 3区  
SK 2 炭層検出状況  
(東から)



右) 3区  
SK 7 検出状況  
(北西から)



左) 3区  
SK 8 断面  
(北東から)

右) 3区  
SK 10 断面  
(南東から)



3区  
SK 10 (南西から)



3区  
SK 12 土器出土状況  
(東から)



3区  
SD 1 (北から)

## 写真図版6



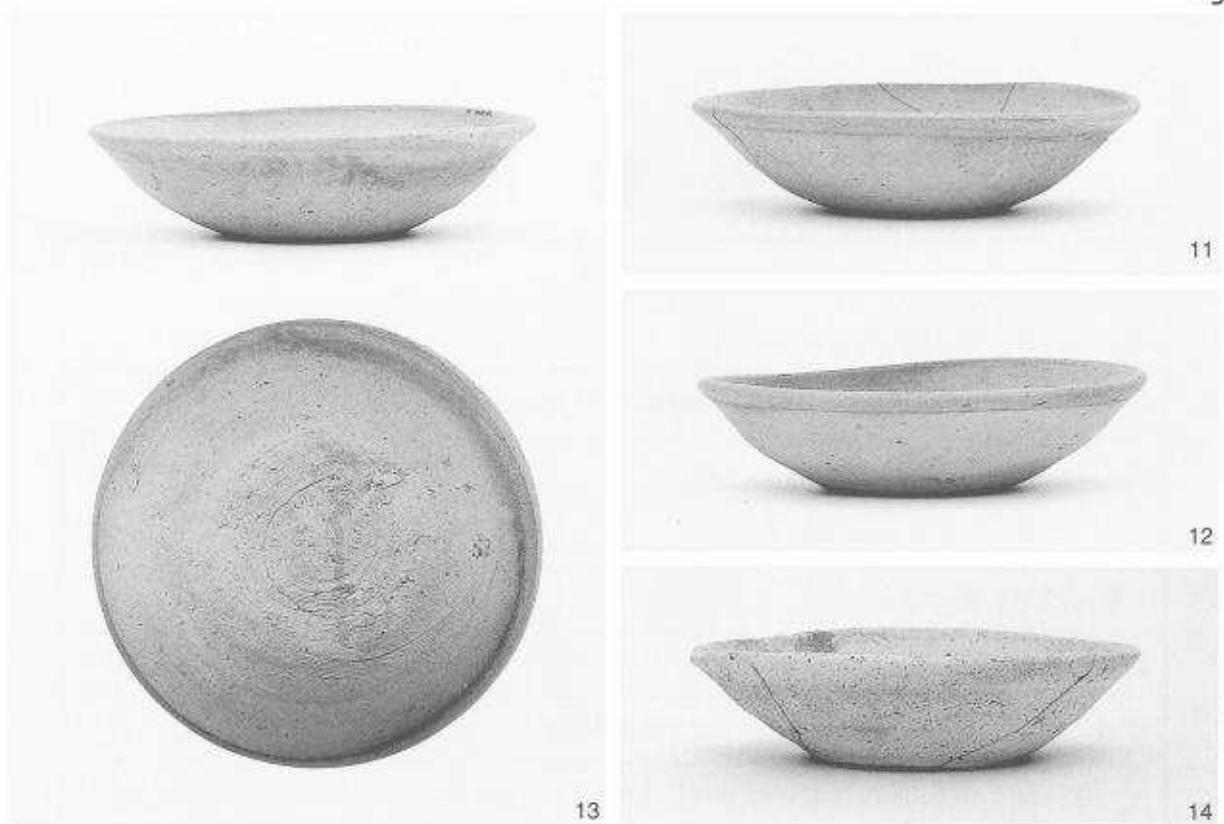
4区 全景（東から）



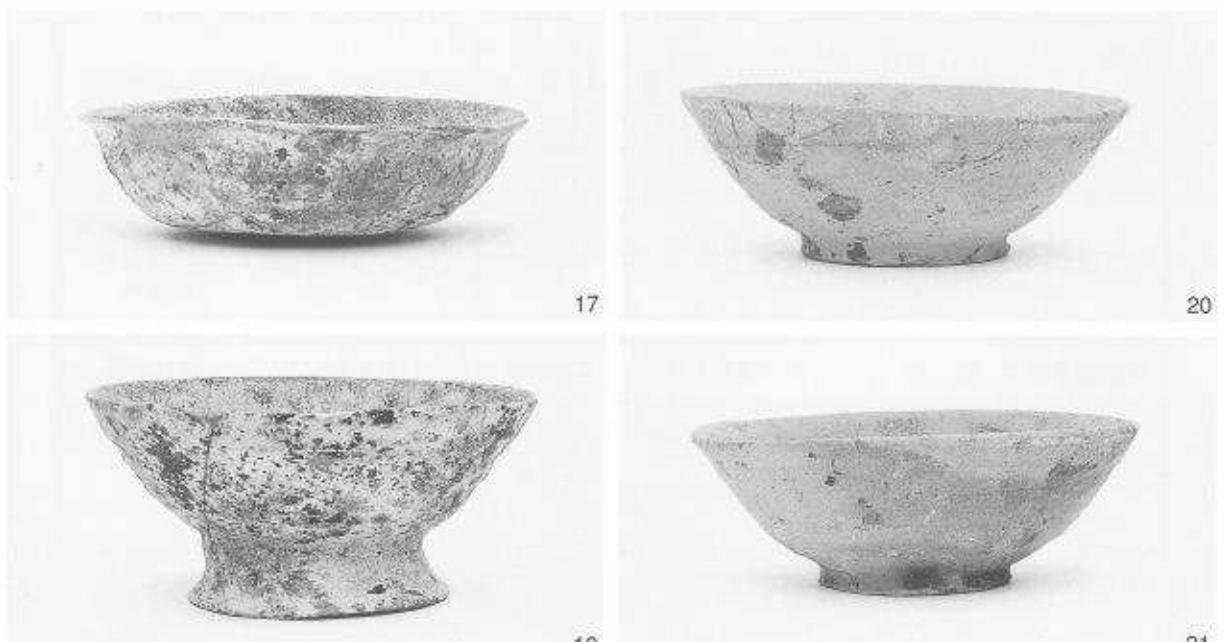
4区 北壁断面  
(南西から)



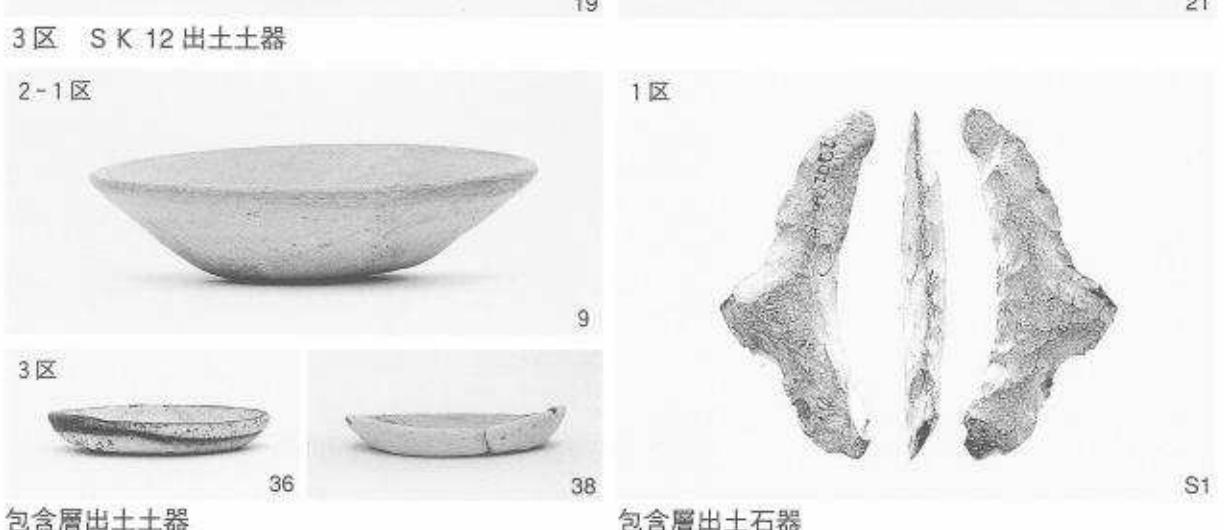
作業状況



2-2区 SK 1 出土土器



3区 SK 12 出土土器



3区 包含層出土土器



包含層出土石器

# 報告書抄録

ふりがな	とだいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	戸田遺跡発掘調査報告書							
副書名	市道情報公園中央幹線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第262冊							
編著者名	平田博幸・長濱誠司							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号						TEL 078-531-7011	
発行年月日	西暦2003(平成15)年12月19日							
所取 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町村					
戸田遺跡	兵庫県三木市 志染町戸田	28215	2002066	135度 4分 12秒	34度 47分 19秒	2002年 7月～8月	630m <sup>2</sup>	市道情報公 園中央幹線 改築事業に 伴う
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
戸田遺跡	集落跡	9世紀後半～10世紀 13世紀		土坑 炭土坑	須恵器・土師器 須恵器		墨書き器	

---

---

兵庫県文化財調査報告 第262冊

# 戸田遺跡

－市道情報公園中央幹線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成15年12月19日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目16-12

印 刷 ユニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

---